

ジュニアスポーツの 育成と安全・安心 フォーラム



平成 25年度
講演録



できる!

だいじょうぶ!

やくそくだよ

いっしょ!

こんにちは

ありがとう

ギュー

キャンペーンキャラクター
あつたの
堂々ちゃん

キャンペーンキャラクター
あつたの
正々くん

あくしゅ あいさつ ありがとう をしよう!

フェアプレイで
日本を元気に
あくしゅ、あいさつ、ありがとう
😊

ありがとう

あくしゅ

117!

おはよう

たのしいね!

コーチや仲間、試合相手や審判、いつもキミたちを支えてくれるお父さんやお母さん、そして、地域の人たちに感謝の気持ちをきちんと示そう。それは、キミたちがスポーツを楽しむ環境をもっとよくすることにつながるんだ。だから、キミたちからフェアプレイを広めよう! さあ、今日から、あくしゅ、あいさつ、ありがとう!

平成 25 年度
ジュニアスポーツの育成と
安全・安心フォーラム

■講演録目次

主催者挨拶 望月浩一郎(日本スポーツ少年団常任委員)…………… 2

主旨説明 竹之下義弘(日本スポーツ法学会副会長)…………… 3

開催要項…………… 4

日程表…………… 5

●特別講演…………… 6

すぐれた選手・チームを育てるのに
指導者には何が求められているのか

——暴力に頼らない指導をめざして

演 者：望月浩一郎(弁護士／虎ノ門協同法律事務所)

●フォーラム…………… 21

子どもたちがのびのびと
スポーツを楽しむための指導について

座 長：菅原 哲朗(弁護士／キーストーン法律事務所)

パネリスト：日高 哲朗(千葉大学教授)

山崎 史恵(新潟医療福祉大学准教授／認定スポーツカウンセラー)

植田 辰哉(日本バレーボール協会育成強化委員会ディレクター／
前全日本男子バレーボールチーム監督)

閉会挨拶 若松 澄夫(公益財団法人スポーツ安全協会会長)…………… 41

主催者挨拶



日本スポーツ少年団常任委員

望月 浩一郎 氏

皆さんおはようございます。本日にここにジュニアスポーツの育成と安全・安心フォーラムを開催するにあたりご多忙のなかご参加いただきました皆様に主催者を代表して心から御礼を申し上げます。

本フォーラムは公益財団法人スポーツ安全協会と日本スポーツ法学会の協力を得て、これまでジュニアスポーツの安全面に焦点を当てた会議を開催して参りました。毎年多くの示唆に富んだご提言をいただき、多くの成果を上げていることは主催者として嬉しいかぎりです。

近年子どもたちを取り巻く環境は大きく変化し、これまででは考えられないようなさまざまな危険が子どもたちにもたらされています。このような状況下において、地域のなかで活動するスポーツ少年団にとって子どもたちが安全に安心して活動する

ための環境づくりは非常に重要な課題となっております。

今日はスポーツ医・科学そしてスポーツ法学の観点から議論を深め、私たちの活動環境を再確認するとともに今後さらなる安全・安心対策を講じるためのきっかけにしたいだければと考えています。

ご参加の皆様には本日のフォーラムで得た知識を現場で活用いただき、子どもたちが安全で安心して活動できる環境整備に、従前にも増してご協力いただきますようお願い申し上げます。

結びになりますが、共催をいただきました公益財団法人スポーツ安全協会、日本スポーツ法学会、またご協賛をいただきました各保険会社、そしてスポーツ少年団協力弁護士の皆様のお力添えに重ねて深く感謝を申し上げます、開会の挨拶といたします。

開催主旨説明



日本スポーツ法学会副会長

竹之下 義弘 氏

顧問教諭による暴力を苦にしてバスケット部主将が自ら命を絶つという、痛ましい事件が昨年大阪で起きたことは皆様ご承知の通りだと思えます。この事件を契機として各種調査が行われましたが、その結果中学、高校の運動部活動において指導者の暴力行為が少なからずあるという実態が明らかになってきました。

ところで日本も批准をしている18歳未満の児童を対象とする児童の権利に関する条約では、児童があらゆる形態の暴力から保護されなければならぬと定められています。また日本におけるスポーツ基本法は基本理念の一つとして、スポーツはスポーツを行う者の心身の健康の保持増進、及び安全の確保が図られるよう推進されなければならないと謳っています。

そこで今回はスポーツ現場におけ

る暴力根絶の観点から、スポーツ指導者に要求される心構えを中心に、まず日本スポーツ少年団常任委員の望月浩一郎弁護士に「すぐれた選手・チームを育てるのに指導者には何が求められているのか——暴力に頼らない指導をめざして——」というテーマで特別講演をしていただきます。午後のフォーラムでは「子どもたちがのびのびとスポーツを楽しむための指導について」をテーマに、菅原哲朗弁護士を座長として、日高哲朗千葉大学教授、山崎史恵新潟潟医療福祉大学准教授、植田辰哉前全日本男子バレーボールチーム監督のお三方にパネリストとしてご参加いただきます。

会場の皆様には最後までこのフォーラムにご参加いただき、今後のジュニアスポーツのご指導に役立てていただければ誠に幸いです。

開催要項

1. 主 旨 社会情勢の変化により、子どもたちが犠牲となる痛ましい事件が数多く聞かれるようになってきた昨今、スポーツ活動の現場及びその周辺においても、子どもたちの安全を確保し、安全にそして安心してスポーツに取り組み、楽しむことが出来る環境を整えることが急務となっている。
本フォーラムは、ジュニアスポーツの育成に欠かすことのできない安全・安心対策について、法学・教育学・心理学・医学などの見地から問題点を明らかにし、議論することにより、問題解決の方策を探ることを目的に開催する。
2. 主 催 公益財団法人日本体育協会日本スポーツ少年団
公益財団法人スポーツ安全協会
日本スポーツ法学会
3. 後 援 文部科学省
4. 協 賛 スポーツ安全保険引受損害保険会社
(東京海上日動火災保険株式会社 他8社)
5. 期 日 平成25年12月8日(日)
6. 会 場 JR ホテルクレメント高松
〒760-0011 香川県高松市浜ノ町1-1 TEL:087-811-1111
7. 内 容 *特別講演「すぐれた選手・チームを育てるのに指導者には何が求められているのか
——暴力に頼らない指導をめざして——」
*フォーラム「子どもたちがのびのびとスポーツを楽しむための指導について」
*ジュニアスポーツ法律アドバイザー研究会(弁護士対象)
8. 参加対象者 スポーツ少年団登録指導者・役職員
ジュニアスポーツに従事する弁護士など法律実務家および学者
スポーツ安全協会関係者
スポーツ安全保険引受損害保険会社関係者
9. 申込方法 所定の参加申込書により平成25年11月15日(金)までに日本スポーツ少年団宛申し込むこと。
10. 定 員 100名
11. その他 この事業は、公益財団法人日本体育協会公認スポーツ指導者の資格更新のための義務研修となります。ただし、水泳、サッカー、スキー(コーチのみ)、テニス、バドミントン、剣道、山岳、空手道、アイスホッケー、バウンドテニス、エアロビック(コーチのみ)、スクーバダイビング、スポーツドクター、アスレティックトレーナー、スポーツ栄養士、クラブマネジャー、プロゴルフ、プロテニス、職業スキーの資格者については、別に定められた条件を満たさなければ資格を更新できません。テニスの指導者は2ポイントの実績になります。

日 程

期 日／平成 25 年 12 月 8 日(日)

会 場／ JR ホテルクレメント高松

◎司会進行 入澤 充(国士舘大学法学部法律学科教授)

10：45 【開会式】

主催者挨拶：望月浩一郎(日本スポーツ少年団常任委員)

主旨説明：竹之下義弘(日本スポーツ法学会副会長)

11：00 【特別講演】

テーマ：すぐれた選手・チームを育てるのに指導者には何が求められているのか
——暴力に頼らない指導をめざして——

演 者： 望月浩一郎(弁護士／虎ノ門協同法律事務所)

12：30 休憩(昼食)

ジュニアスポーツ法律アドバイザー研究会(※弁護士対象)

13：30 【フォーラム】

テ ー マ：子どもたちがのびのびとスポーツを楽しむための指導について

座 長：菅原 哲朗(弁護士／キーストーン法律事務所)

パネリスト：日高 哲朗(千葉大学教授)

山崎 史恵(新潟医療福祉大学准教授／認定スポーツカウンセラー)

植田 辰哉(日本バレーボール協会育成強化委員会ディレクター／
前全日本男子バレーボールチーム監督)

15：30 【閉会式】

閉会挨拶：若松 澄夫(公益財団法人スポーツ安全協会会長)

「指導者、上級生の暴力」
「指導者の悪弊の残滓」

特別講演

すぐれた選手・チームを育てるのに 指導者には何が求められているのか

暴力に頼らない指導をめざして

日本スポーツ少年団常任委員
弁護士／虎ノ門協同法律事務所

望月 浩一郎氏

弁護士になって3年目ぐらいのときに、頸椎の損傷を負った患者さんの労災に関する相談にのるため埼玉のリハビリテーション病院に行きました。依頼者から「この病院には私よりもっとかわいそうな人がいるから是非相談にのってほしい」と言われました。その患者さんも首の骨を折って頸椎骨折の四肢麻痺。その次に言われたのが「私はこの病院のなかでは貴族なんです、平民や貧民の人がいる」と。何を言われているのかわかりませんでした。よくよく聞いてみると、労災というのは年金が受けられるので高度障害の場合は、保障の面から見て安定している。平民と言っていたのは交通事故の患者さん、一応保険がある。ところがスポーツで事故に遭うと自己責

任になり何の保障もない、大変かわいそうだと思います。そこから私は、スポーツにかかわるようになりました。

今日は暴力の問題ですが、実はここ10年私は指導者育成の場で「スポーツと法」という講義を担当してきました。1コマ2時間の枠のため、そのなかで事故の予防から暴力の問題も扱い、フェアプレーさらにドーピング、仲裁の問題にも触れなくてはならず、去年までは暴力に大体15分ぐらいしか時間を費やせなかった。そうすると受講している指導者がシラッととして聞いているのがわかります。

「強い選手・チームを育てたことがない素人の戯言！」と腹の中で思っているのが伝わってきます。

今日はじっくり皆さんの腹のな



ジュニアアススポーツの育成と安全・安心フォーラム

図1

体罰・暴力・ハラスメントを法的に見ると

刑法で禁じられている犯罪行為

- ▶ 暴行罪(刑法第208条)
- ▶ 傷害罪(刑法第204条)
- ▶ 強制わいせつ罪(刑法第176条)
- ▶ 強姦罪(刑法第177条)
- ▶ 脅迫罪(刑法第223条)
- ▶ 強要罪(刑法第224条)
- ▶ 軽犯罪法
- ▶ 各都道府県の迷惑防止条例

民事上も損害賠償の対象

- ▶ 「故意又は過失によって他人の権利又は法律上保護される利益を侵害」する場合
- ▶ 「これによって生じた損害を賠償する責任を負う」(民法709条)

かに落ちる話をします。実は法律家として語るべきことはこの1枚のスライド(図1)で全部です。刑法でもダメだと言われているし、民法でも違法だと、だからダメですよ、と。ところがそれでは皆さんに納得してもらえないので、今日私がやるうとしてしていることは全然法律家らしい話ではありません。ほとんどスポーツ心理学あるいはコーチング学の領域の話になります。

1. 体罰と暴力の現状について

現在でも暴力容認派が多数だというのが私の実感です。進学校で有名な開成高校の野球部監督の青木秀憲さんがちょうど1カ月前の11月8日、日弁連が開催したシンポジウムでシンポジストとして参加されました。その席で「昨日まで暴力を實際にふるっていた人、それから許していた人たちが一斉に暴力はだめだと言いつつ出たことに非常に違和感を覚える」と語っていました。「手のひら返し」じゃないかと。私は青木先生に、「手のひら返しをしてくれた人はまだいいんですよ。実際には手のひらをまだ返していない人が山ほどいるので、そこをどうするか考えましょう」と言いました。

実際、悲しいことですが今年の2月、ある少年団の市町村レベルの本部長さんとお話したときに「暴力の問題なんか大したことじゃないんだ」と面と向かって言われました。「今だけなんだ、ちょっとのあいだ首をすくめていればいいんだ」と。今年の2月28日に日本体育協会で公認スポーツ指導者養成団体連絡会議という各競技団

体の指導者養成の責任者を集めた会議がありました。私もそこに招かれたのですが、ある中央競技団体の責任者の方が「何で暴力の問題でこんな忙しいときに会議なんかするのか」と。大変驚きました。これが現状だと思っています。

文部科学省が全国の学校の暴力について調査をしました。昨年度懲戒件数400件強ですから、ざっと10倍以上に増えています。

(※部活でのコーチによる暴力シーンのビデオ上映)

皆さんこの映像を見て何を感じましたか? ここには3つの事実があります。1つ目の事実、このビデオは保護者が撮っていることです。保護者が見ている前でやっている。2つ目の事実、他の指導者の目の前でやっていることです。保護者も他の指導者も誰も注意もしなければ止めようともしていません。この外部指導者は悪いことをやっているという認識が全然ないから正々堂々と暴力をふるっている。3つ目の事実、中

央競技団体役員のコメントです。「やり過ぎ」「部感情的になっている」。これでは明らかに認識に誤りがあります。競技団体の認識の不十分さがこういう暴力を許していると思います。

■顧問の暴力が原因となり部活中に熱中症で死亡

(※別のビデオ上映での音声から) 僕は兄貴を熱中症で失いました。2009年8月22日のことです。17歳だった兄貴は大分県立高校剣道部の主将でした。顧問は日常的に暴力をふるい、部員は機嫌をとる雰囲気でした。

前日に布石がありました。顧問は「足が動かなくなるまで練習しろ」と命じました。兄貴が練習が終わったことを別の場所にいた顧問に報告に行くと、「歩いてきたということは足が動くということやないか、明日覚えてるよ」と言われたそうです。

22日の練習は午前9時に始まりました。給水は10時頃にコップ2杯程度だけでした。ふらつく兄貴はみんなの倍く

らしいの練習をさせられ、「気迫がない」などと面を持ち上げて殴られました。面をつけて直そうとすると、「そうやって休憩するんか」と壁にぶち当たるほど突き飛ばされました。

練習は兄貴だけが終えさせてもらえませんでした。ふらつき、ひざまずいても続き、兄貴は「もう無理です」と言いました。そんなことを言うのは初めてでした。それでも何度も立ち上がり打ち込んで倒れました。「目標は何だ？」という顧問に兄貴は「大分県制覇です。俺、キャプテンやけん、頑張るけん」と言って打って出て倒れました。

兄貴は竹刀を落としたことに気づかず、座った格好で両ももを叩いていました。竹刀を振っていたつもりだったのです。このとき重度の熱中症だったことが今年3月の大分地裁の判決で認められています。そして面を外し、うろろ歩き、壁にぶつかり「アーン」と叫びながら仰向けに倒れました。顧問は「演技するな」と馬乗りになり10発

程度往復ビンタをしました。目を見開き反応をしない兄貴に「救急車を呼ぶか？」と聞いていました。救急車が来たのは午後0時25分です。その夜亡くなりました。

大分地裁は顧問やその場にいた副顧問、県などの過失を認めましたが、両親は控訴しています。顧問、副顧問については国家賠償法の公務員個人は不法行為責任を負わないとする規定が適用され、損害賠償責任が認められなかったからです。

■たび重なる体罰に耐えられず自ら命を絶った部活生徒

体罰問題で懲戒免職となった大阪市立高校のバスケットボール部元顧問の教諭。初めてメディアの取材に応じました。

(※ビデオ上映での音声から)

「私が部活動を指導してきたなかで、教え子が自ら命を絶ったことに対して心からお詫びいたします」

公立高校のチームを全国レ

ベルに育て上げた指導者として広く知られていた元顧問。19年前この高校に赴任した当初から体罰を行っていたと言います。

「赴任当時の19年前から手を挙げていました。当時素行の悪い生徒が部員で何名かおりましたので、最初は説明をしてやっていたのですが、手を挙げることによって落ち着いたということもありました」

大阪市の外部監察チームの報告書によれば、キャプテンだった男子生徒に対する体罰は執拗で、その暴力が生徒を自殺に追い詰める大きな要因になったと結論づけています。

「チームを強化するのにどうすればいいかと考えたところ、亡くなった彼のレベルアップがチーム全体のレベルアップにつながるとその時そのように考えました。彼を呼んで何故意識をしないのか、何故相手を見ないのかというようなことで、ひと言ひと言彼に尋ねながら叩きました」

生徒が元顧問に渡そうとした手紙には体罰に苦しむ胸の

内が記されていました。

「キャプテンしげけば何とかなると思っっているのですか。毎日のように言われ続けて僕は本当にわけがわからな……」

しかしこの手紙を渡すことなく生徒は命を絶しました。元顧問が手紙を見たのは生徒の死から一週間後遺族のもとを訪れたときでした。

「この手紙を見たときに私が彼自身を死に追いやったと。本当に何も気づかない自分に、家族の悲しみがきちんとわかっていない自分自身の愚かさ気がつきました」

自分の指導理念が間違っていたことに気づいたのですか？

「はい。何とかその手を挙げることでいるんなことが変わらと思っていましたが、そうではなく、そのことに対して本当に嫌がって気持ちが悪くついていることに気がつきました。私に語る資格はありませんが、このようなことが二度と起こってはいけないと思いい、ここに出させていたかったです」



この事件を聞いたときに、青木さん(前出)か福田(正博)さんが最初の感想で、「何で部活をやめなかったんだろう」と。普通はこういふときは辞めていって自分の身を守る。それができなかった理由はどこにあったのだろうという問題意識でした。私自身は日本バスケットボール協会の裁定委員として元顧問から2時間ぐらいヒアリングしました。亡くなった子どもも本当に気の毒ですし、元顧問も気の毒だというのが私の印象です。誰がいけないのか、大阪のバスケットの協会と大阪の教育委員会は何をしていたのかというのが私の意見です。よく勝利主義、競技志向が暴力の原因だと言う方がいますが、私は副因にはなっても主因ではないと思います。

元サッカー日本代表の福田正博さんが「指導力は「情熱×指導方法」だ」と興味深い話をされました。情熱は「あるか(100)」、ないか(0)」という正の数値で表せませんが、指導法に関しては「正しい指導法を知っている(100)、知らない(0)、誤った指導法を知っている(マイナス100)」という負の数値もあります。たとえば、情熱が100で正しい指導方法

(100)を習得していれば、プラス1万の指導力です。ところが、同じ情熱があっても誤った指導方法(マイナス100)を身につけていけば、マイナス1万の指導力になってしまいます。これこそがこの高校バスケットボール部の事件など、これまでスポーツ界で起こってきた問題の元凶です。ですから指導方法がマイナスに振れたときに早い段階でいかに芽を摘むか、これがなければなりません。

スポーツ指導の場合は「体罰」ではなく「暴力」

「体罰と暴力」(図2)、この2つの言葉も少し整理しておきます。

「校長、及び教員は教育上必要があると認めるときは文部科学大臣が定めるところにより児童、生徒、及び学生に懲戒を加えることができる。ただし、体罰を加えることはできない」(学校教育法第11条)

ということ、懲戒の場面ではない指導の場面での体罰はあり得ません。試合で負けた、練習で失敗した、こういうときにふるうのは単なる暴力です。まして教員ではないスポーツ指導



者の場合には体罰という言葉が当てはまる余地はゼロです。だから本当は暴力と言ったほうが正確ですが、慣例的に体罰という言葉も使いながら今日は話をしていきます。日本体育協会は2004年には倫理に関するガイドラインを作っています。

「スポーツを行う際、または指導する際に問題解決の手段として、暴力行為、直接的暴力、暴言、脅迫、威圧等を行うことは厳に禁ずる。役員及び監督、コーチ、審判員等の指導的立場にある者はその立場、役割、権限等の範囲を超えた精神的・身体的暴力行為等をスポーツ競技会・行事などに携わる関係者及び競技者等に与えないこと」と、あります。

これは2004年から一貫した姿勢ですが、残念ながら日本体育協会は自らの反省として十分な取り組みが行えていたとは評価していません。ですからもう一回暴力根絶宣言を5団体で作ったわけです。2012年時点で暴力と戦っている競技団体はどこがありませんかと聞かれると、私は学生野球しかないと思っていました。高野連と大学野球協会。

暴力と戦うための4つの条件

暴力は許さないと競技団体としての「宣言」。暴力を許さないと競技団体としての毅然とした「行動」。暴力に頼ろうとする指導者への「教育」。隠蔽を許さない「対応」。

暴力と戦うためにはこの4点が必要です。この4つができていな

体罰と暴力

- 学校教育法第11条〔児童、生徒等の懲戒〕校長及び教員は、教育上必要があると認めるときは、文部科学大臣の定めるところにより、児童、生徒及び学生に懲戒を加えることができる。ただし、体罰を加えることはできない。
- 民法第822条（懲戒）親権を行う者は、第八百二十条の規定による監護及び教育に必要な範囲内でその子を懲戒することができる。
- 試合で敗れたこと、練習で失敗したことは懲戒の対象とはならない。なぜなら、「教育上必要」とは認められない。
- 懲戒権を有しないスポーツ指導者の有形力の行使は単なる暴力であって体罰とは言わない。

いと、暴力は蔓延します。

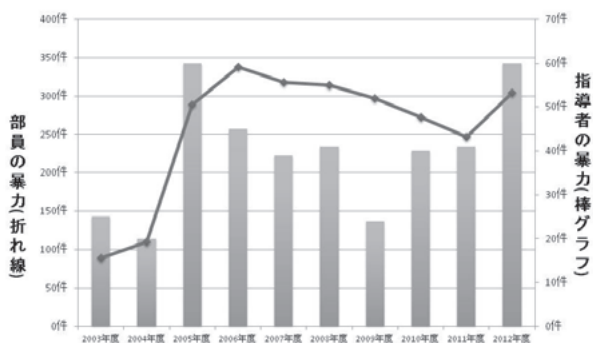
まず一番目の「宣言」について。日本学生野球憲章では、学生野球は一切の暴力を排除し、いかなる形の差別をも認めないと宣言。その理由は学生野球は教育の一環であり、平和で民主的な人類社会の形成者として必要な資質を備えた人間の育成を目的とし、暴力による強制はこの目的に合致しない。

東大の副学長だった石井紫郎先生と早稲田大学の浦川道太郎先生

図3

暴力の負の連鎖 指導者と部員の暴力 日本高等学校野球連盟への報告から

指導者の暴力・部員の暴力



そもそも倫理規定がないのが19競技団体、これが日本のスポーツ競技団体のレベルです。

求められる厳しい対応

日本オリンピック委員会（JOC）は夏季冬季オリンピック競技31団体の強化責任者からの聞き取り調査を実施し2013年2月8日、すべての団体から暴力、パワーハラスメント、セクシャルハラスメントは一切ないと回答を得たと発表し、暴力は日本のスポーツ界の一部の問題であるとリリース。実はこれがひとつのきっかけになって今年の2月19日、国会の参議院の講堂で急遽スポーツ法学会が主催してシンポジウムを開催しました。まさに競技団体やJOCがこういう認識でやっていたら大変困るといので、そのシンポジウムにはJOCの竹田恆和会長、市原則之専務理事、日体協の岡崎助一専務理事もいらっしやいました。率直に言っただけでかなり厳しい言葉で中央競技団体がきちっとした対応をしないと困りますというお話を申し上げました。

一方高校野球ではどんな対応をしているかと言えば、違反行為の

申告者が学校に来るときもあり

すが、都道府県の高野連や日本高野連に直接来るときがあります。学校は隠蔽する、誤魔化す、と思われているからです。高野連が学校に基本的に調査を求めますが、大阪の市立高校みたいな一通りの調査で「体罰はありませんでした」といった報告は基本的に受け付けません。ちゃんと被害を受けたという子どもたちに聞いてください。場合によってはこれを三往復ぐらい行います。それぐらいキツチリとしています。もちろん処分を受ける側も権利保護が必要ですから、学生野球協会の審査室が一番、さらに日本学生野球協会の不服審査委員会が二審、日本スポーツ仲裁機構が三審。それから正という形で処分も厳しくしますが処分されるほうもきちんと権利保護するという制度を取っています。

2. 暴力とたたかうために

2人に1人は痛みのため練習を制約、7割以上が痛みを抱えながらプレー。約4人に1人(26.9%)は症状があっても練習を休まなかった。投手を対象に行った検診

では55人のうち39人が肩や肘を中

ます。

この図3に示した折れ線グラフが部員の暴力、棒グラフが指導者の暴力なんです。指導者の暴力が2012年度で60件弱、部員の暴力が300件強。一年間にこれぐらい起こります。私は審査室の委員をつとめています。毎月一回審査室の会議を開くと、大体上がつてくる案件が30件ぐらいあります。審査室に上がるのは重大な案件ですから注意や厳重注意で済ませるような軽微な事件も含めると、おそらく1000件を超えています。これだけ関わっても高野連でさえなかなか暴力をゼロにはできません。

もうひとつ注目すべきは指導者の暴力よりも部員の暴力のほうが圧倒的に多いこと。5倍から7倍あります。これも後ほどお話ししましょう。

心に何らかの障害。「入学時から既に故障がある選手が多い可能性がある」とある「高原政利・泉整形外科病院 副院長」

実は高校に来るときにはもう

図 4

指導者の暴力の4タイプ

確信犯型	指導方法わからず型	感情コントロールできず型	指導者のストレス解消型
<ul style="list-style-type: none"> 暴力をふるうことを有益で必要だと信じている。 高校野球でこのパターンは少ない 	<ul style="list-style-type: none"> 暴力をふるうことはダメとわかっている、手上げる以外の指導方法を知らない。 高校野球で一番多いタイプ 	<ul style="list-style-type: none"> 暴力をふるうことはダメとわかっている、感情のコントロールを失って手上げる。 高校野球で次に多いタイプ 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のウツプンばらしやストレス解消。暴力をふるうことを楽しむ。 2005年の四国中央市のバスケットボールでの罰走事件

しつかりスポーツ障害と暴力を身につけて来ます。リトル、シニア、ボーイズこういったところを変えて行かないと実は野球では改善されません。ですからスポーツ障害と暴力の根はひとつです。実態アンケートを取ると1割ぐらいの選手が暴力を受けていたという報告になっています。

まず宣言すること。立場を明確にしないとダメです。次に自分の競技で何が起きているのか、こ

図 5

強い選手・強いチームを育てるためには何が必要か—スポーツにおける真の勝利

- 暴力に頼って服従させる指導→選手の心に火をつける指導
- 暴力で強制し、服従させるロボットや軍隊の兵のような選手=自身で当・不当/解決方法を考えない指示待ち選手をつくる指導→自分で考えて、指示がなくても先を見越して行動できる選手を育てる指導
- 失敗させないためには罰が有効だとする指導→失敗はいつもありうるとした上で、失敗を少なくさせ、失敗の次を考える指導
- 「はい」と返事する選手を求める指導→選手を「待つ、信じる、許す」ことができる指導
- 指導者の経験に頼る指導→指導者自身が研鑽し、常によりよい指導を探求する

図 6

確信犯型の暴行を支える指導者

- 「あるとき、気を抜いた練習をとがめられて、ボコボコに殴られた。『殴る監督の目に涙があった。それを見たとき、私はこの監督について行く決心をした。』(浜田昭八 2008年8月15日日経)
- 「選手が練習の中で越えられない壁を自分で作ってしまっているのを何とかしたかった。暴力の意識はなかった」(全日本柔道連盟元代表監督)
- 「指導の一環だった」(松江市の市立学校空手柔道部外部指導者)
- 「生徒の態度が不真面目だった。反省しているが、体罰との認識はなかった」(京都府立網野高校レスリング部顧問)
- 「体罰と訴えられた監督がいたとして、専門部の調査により、必要な鉄拳であって本人も保護者も『当然です』と納得しているケースなら、専門部がその監督の正当性をアピールして守ってやる。」(高体連レスリング専門部理事長)

れも実態をまず把握しないと対策が取れません。なぜ起こっているのか原因を分析する、防止策を講じる。ここまでやれている競技団体は、まだほとんどありません。

どのような指導スタイルを選ぶべきなのか

指導者の暴力には4つのタイプ(図4)があります。一つが暴力をふるうことを有益だと信じている

方、確信を持っていてる方。次に暴力をふるうことはダメだと理屈ではわかっていても、つい手が上がってしまう。他にやりようを知らない。これが高校野球で一番多い。高校野球ではこの段階で芽を摘んでいるので確信犯型の段階に発展しません。それからキレちゃうタイプ。感情をコントロールできない。それから本当に暴力好き。愛媛で2005年にありました。スポーツにおける真の勝利を得

る目的で強い選手・強いチームを育てるためにはどちらの道を選びますか?(図5)

●暴力に頼って服従させる指導を選ぶのか⇕選手の心に火をつける指導を選ぶのか●暴力で強制し、服従させるロボットや兵のような選手、自身で当・不当、解決方法を考えない指示待ち選手をつくる指導を選ぶのか⇕自分で考えて指示がなくても先を見越して行動できる選手を育てる指導を選ぶのか



か●俺について来いと命令する指導を選ぶのか①何故この練習をするのかを選手に理解させる指導を選ぶのか●失敗させないために

は罰が有効だとする指導を選ぶのか①失敗はいつもあり得るとした上で、失敗を少なくさせ、失敗の次を考えさせる指導を選ぶのか●

「はい」と返事する選手を求める指導を選ぶのか①選手を「待つ、信じる、許す」ことができる指導を選ぶのか●指導者の経験に頼る指導を選ぶのか①指導者自身が研鑽し、常によりよい指導を探求することを選ぶのか
皆さんどっちを選びますか。それが今日考えていただきたいテーマです。

暴力を支持する指導者

暴力を支える人々は圧倒的多数派だと思います。まずアスリート自身が支持しています。指導者も支持しています。保護者や支援する人たちも支持しています。なぜ暴力を支持するのか。暴力で選手を服従させることで、強いチーム・強い選手を育てられると信じているからです。だから有効な指導方法だと思っている。ここを克服しないと暴力を根絶できません。

野球の桑田真澄さんが東京六大学とプロ野球選手550人にアンケートを取りました。なんと83%が暴力の肯定派です。圧倒的多数です。ですからこうした人々が将来指導者になるとなると暴力に走

るのは当たり前です。同じように、朝日新聞が今年大学運動部の選手にアンケートを取りました。そもそも自分が体罰を受けたことがあるというアンケート結果が高校では7割を超えている。体験者なんです。体罰はあっていいかと問うと「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」が半分から3分の2。そこからどういう影響を受けたかというのと、「いい影響を受けた」という答え。スポーツを教える側になったときに体罰を使うかという質問に、「使う」と答えた者が半分以上います。これが現状です。指導者も暴力を支持しています。

「ある時、気を抜いた練習をとがめられて、ポコポコに殴られた。殴る監督の目に涙があった。それを見たとき、私はこの監督について行く決心をした」(図6)。

浜田さんはこれがいいと言っているわけではありません。こういう誤った成功体験がいつまでも受け継がれているから暴力がなくならないと言っているのです。暴力に頼る人、これは暴力のなかで生き残った勝ち組の体験者です。そ

の陰で暴力で辞めていった人が山ほどいる。誤った成功例が受け継がれているのが大多数です。

■暴力が若いアスリートをしぶつていく

2009年インターハイ出場、2009年、2010年、2012年関東大会出場、2008年全国高等学校バレーボール選抜優勝大会に出場した群馬県立高校女子バレー部。
前橋地方裁判所は2012年2月17日元監督の部員への暴力を認めて群馬県に慰謝料

など143万円の支払いを命じる判決を言い渡した。判決は部活動の顧問である元監督が部員に対して他の部員やその保護者等の面前で、複数回にわたり、ときには竹刀まで用いた暴行をした事実を認めた。部員は中学校在学中からジュニアオリンピック群馬県代表選手などに選出されるほどのバレーの実力を有していたにもかかわらず、本件暴行が一因となってバレー部を退部し、神経性食思不振症、うつ状態、心因反応及び不眠症と診断され、登校できなくなり、ひいては転学するに至った事実を認めた。

群馬県及び元監督は元監督が部員を竹刀や平手で叩いたことなどは認めたものの違法性を否定した。長年にわたり部員の保護者の面前においても平手や竹刀で叩いて指導を行ってきたが部員やその保護者から苦情はなかった。従って被害者である部員及びその保護者の目視の承諾があり、違法性が却却される。これが群馬県の訴訟における主張だった。こうして日本のトップアスリートになったかも知れない若い選手がしぶつされた。

のクラブ員が脱落しましたか？
これを問わなければいけないと思います。

Spare the Rod, Spoil the Child?

「行きすぎた体罰はよくないが、人を成長させるためには必要じゃないかと思う」「体罰と教育とは紙一重だと思う。自分も甘えたときに叱咤激励されてやってこれた。それが体罰と言えば違う」「柔道・園田前監督について、あれだけ愛情を持ってやっていたヤツが、何でこんな目に遭わなきゃいけないんだ」

柔道オリンピックのコメント

オリンピックがこういう発言ですから非常に悲しい内容です。保護者も支持しています。

「感情的なものでなく、叱咤激励の意味を込めた愛の体罰であれば問題ないように思う」

「体育系特有の理不尽な負荷が社会に出てから役に立った。折れない気持ちを得ることができた」

「監督に50発以上連続して叩かれた経験があるが、全て納得し、今でも感謝している。愛情のこ



これは去年の判決です。10年前20年前ではないのです。裁判でまだこういう主張をするというのが自治体のレベルなんです。
「百戦百勝は善の善なる者に非ざるなり。戦わずして人の兵を屈するは、善の善なる者なり」
いきなり孫子になりましたが、戦えば必ず兵を損ないます。ですから最善なのは一兵も損なわないで勝つこと。ちょっとこれをスポーツに言い換えると暴力をふるえば必ずスポーツを嫌いになる人を作ります。あなたの指導で何人

もった敵しい指導のおかげで、今の基礎ができ、社会に対応できる精神が身についた」

「娘が試合中にひっぱたかれることもあるが、親として指導方法に納得している」

こういう親は体罰の、暴力の勝ち組の親なんですね。だから肯定できる。

明治時代まで日本は実は暴力に
関して先進国でした。

Spare the Rod, Spoil the Child
↓ 鞭を惜しめば、子どもを台無しにする

これがヨーロッパでの発想。日本は江戸時代まで欧米に比べても暴力には否定的でした。

●江戸時代の藩校や寺子屋は総じて体罰には抑制的。

●熊沢蕃山などの儒学者も体罰が有害無益かを説いた。

●徳川光圀も体罰反対論を展開。
●明治政府も1879(明治12)年に教育令で体罰禁止を法制化

明治維新の後日本にはいろんな外国人が来ましたが、学校に行つて何故こんなに日本は体罰がない

んだと言つて驚いたという記録がされています。それがどこで狂つたのでしょうか？ 朝原宣治さんは、ずっと陸上一筋だと思つていたら、中学までハンドボール部だったそうです。彼はこんなふう
に話しています。

「中学のハンドボール部では、試合でミスがあると先生から頭を小突かれました。練習中に水を飲めないのもきつかったです。隠れて飲んだのがバレるとうさぎ跳びをやらされました」

水を飲むな、暴力、うさぎ跳び、3点セットです。これで日本のハンドボール界は優秀な人材を失いました。幸いにして陸上で華開いていただいたので日本のスポーツ界全体としては損失にはならなかったのですが。

元NHKのアナウンサーをして
いた山本浩さんと先日話をしました。いま法政大学のスポーツ健康科学部の学部長ですが、70年代の前半にバレーボールやバスケットボールの全国大会をNHKが中継するときに監督が選手を殴っている。全国に中継が流れているのに苦情の電話一本もなかったのが当時の実態だったそうです。

3. 暴力を必要としない指導方法

日本高等学校野球連盟の甲子園塾の参加者が語る感想。

●「二泊三日で寝食をとにもする中で、いろんな悩みを打ち明けられた。体罰の是非についても、夜中まで話し合った。技術の指

導より、子どもたちをどう導くかに悩む指導者が多かった」

●「同じ境遇の仲間や先輩というネットワークができるだけでも意義がある。私にとっても、自分自身の指導を見つめ直すいい機会になった。各競技にそういう場が広がって欲しいと思う」

為末大氏(陸上)、桑田真澄氏(野球)、古賀稔彦氏(柔道)、立花龍司氏(野球)、田嶋幸三氏(サッカー)、佐々木則夫氏(サッカー)、齋藤春香氏(ソフトボール)たちの暴力を必要としない(有害であるとする)指導方法に学びました。



私が指導方法を語つてもおそらく説得力がないので、こういう方々の力を借ります。

図7

スポーツでの真の勝利を目指すには

- 暴力の原因は勝利主義、競技志向ではない。
 - 勝利を目指すには、指示待ち選手では限界
 - 選手みずから考えてプレイする力
- 暴力の原因は、真に勝利をめざすための正しい手段を知らない。
 - 科学的な根拠(エビデンス)に裏付けられた指導
 - そのトレーニングがどういう目的で、どういう効果をもたらすかを指導者と選手が共有する作業。

「選手自身に考えさせる」

暴力の原因は勝利主義、競技志向ではないと思います。本当に勝つためには選手自ら考えてプレイする力が必要です。では何故暴力に走るのか。本当に勝つために何が必要なのかというエビデンスに基づいた指導を知らない、それとコミュニケーションができていない。ここが大きい問題だと思って

います(図7)。

桑田さんがこう言っています。

●「絶対に仕返しをされない」という上下関係の構図で起きるのが体罰です。監督が采配ミスをして選手に殴られますか？ スポーツで最も恥ずべきひきょうな行為です。

●殴られるのが嫌で、野球を辞めた仲間を何人も見ました。スポーツ界にとって大きな損失です。

●指導者が怠けている証拠でもあります。

●野球で三振した子を殴って叱ると、次の打席はどうすると思いますか？ 何とかしてバットにボールを当てようと、スイングが縮こまります。「タイムミングが合っていないよ。他の選手のプレーを見て勉強してごらん」。そんなきつかけを与えてやるのが、本当の指導です。

●体罰を受けた子は、「何をしたら殴られないで済むだろう」という思考に陥ります。それでは子どもの自立心が育たず、自分でプレーの判断ができません。

まずジュニアのレベルでこれです。立花龍司さんが面白いことを

言っています。まさにスポーツ心理の問題ですが、「失敗しないための練習から上手くなるための練習へ」というものです。高めのボールを打ち崩せないような投手と対戦したらどうするか。「高いボールを打つな」という言い方、あるいは「へそから下のボールを打って行け」という言い方。これらは同じことを言っています。表裏の関係です。ところが「高い球に手を出すな」という言い方をすると、三振の山になる。「へそから下のボールを打って行け」という前向きな指導をするというのが正しいんだというのが立花さんの立場です。同じように守備の練習でも「エラーするな」というマイナス思考はダメだと。「体の正面でボールを捕れ」と、こういう指導をするのが正しい指導だと彼は言っています。

子どもに向き合う

NHKはスポーツの全国大会に去年出場した150余りの高校を対象に緊急アンケートを実施。全体の39%にあたる41校で、これまでに部活動の指導で体罰が問題になったことがあると答えています。

体罰をした理由を複数回答で尋ねたところ、63%の高校が指導のためと答え、37%が生徒に違反行為があった、32%が士気を高めるためなどと回答しました。

2012年に全国大会に出場した帝京長岡高校バスケットボール部の顧問・柴田勲さんはかつて部活動の指導で体罰の経験がありました。自らが学生時代に体罰を受けていたこともあり、厳しい指導は生徒の技術を向上させ、意欲を引き出すと考えていたと言います。しかしこうした指導に限界を感じる出来事に遭遇します。ある大会で格下のチームに敗れた時、柴田さんは試合後に気持ちを奮い立たせようと生徒に厳しくあたりました。しかし生徒はついて来なかつた。この時のことを柴田さんは、子どもたちのバスケットを楽しもうという気持ちを摘み取ってしまったと振り返ります。この出来事をきっかけに柴田さんはそれまでの指導方法を見直すことになりました。コーチングの講習会に参加したり、指導に定評ある他の学校の監督に話を聞いたりしました。そしていま取り組んでいるのが生徒にどんなプレーを期待するのか、一つひとつ丁寧に伝える方



法です。

それでは先ほど出た甲子園塾を
ちよつと覗いてみましょう。

■待つ・信じる・許す

(※ビデオ上映での音声から)

1945年石川県能登半島の小さな町に生まれた。進学した地元の公立高校では甲子園出場なし。大学ではボール拾いや専ら控え選手だった。大学卒業後星陵高校の社会科の教員となり、野球部監督に就任。部員わずか8人のチームから甲子園を目指した。そして5年後に初の甲子園を掴む。

当時の新聞記事には鬼監督の文字。

「目標をしっかりと設定しな
きやいかなから、パンツから
シャツから何から何まで、天
井からトイレから全部「甲子
園」と書いて、いまやったら
死ぬんじゃないかなという超
スパルタですよね」

監督として春夏合わせて25
回の甲子園。創部50年を超え
た星陵高校野球部のOB会に
は山下(知茂)野球を叩き込ま
れた多くの卒業生が集まる。
「鬼やね(笑)、鬼、鬼」「練習、
練習、練習。朝と晩と」「水も

飲めないし」

勝つために自他共に認める厳
しい練習。しかし1979年、
指導法をガラリと変える試合
が訪れた。甲子園春夏連覇を
目指す和歌山代表箕島高校と
の一戦は1対1で延長戦に突
入する。12回1点を勝ち越し
た星陵だが、その裏同点に追
いつかれた星陵は16回、この
試合三度目のリードを奪う。
その裏箕島の攻撃も2アウト。
一塁へのファールフライ。
誰もが星陵の勝利を確信し
た。

このとき初めてファウルグ
ラウンドに設置された人工芝
につまずいた一塁手が転倒し
てアウトにならず。次のポー
ルはホームラン！甲子園球場
に奇跡は生きています。

試合中、山下さんの目には
箕島の尾藤公監督が見せる笑
顔が焼き付いた。「監督とい
うのは顔と顔の勝負なんだよ
ね、体と体の勝負なんですよ
ね。尾藤監督はゲームの中で
笑うんですよ。何を笑うの
かっていうことを帰ってから
ずっと研究したんです。そし
たら『待つ、信じる、許す』と

いうことができる監督だ
と、だから器が僕とは全然違
うなと感じたんです」

山下監督の姿から「待つ・
信じる・許す」このできな
い自分の未熟さを感じた。試
合の後、自宅の玄関には大き
な鏡が取り付けられた。

「僕は今までが俺が俺が俺
がっていう野球をやっていた
んですね。俺がっていうのを
捨てなきゃいけないなど。グ
ラウンドから帰ってきてから
一日今日これで良かったのか
など、これで納得するような
自分かなと鏡の中で対話する
わけです。自分が悪いんだか
ら生徒が光らないわけです。
やっぱりいかに自分を磨いて
生徒を光らせるかということ
を考えていかなければならな
いと思うんですけどね」

以来野球の鬼は同時に読書
の虫となった。悩んだときに
は美術の本を開き感性を磨
く。本に費やす費用は月にお
よそ5万円。また多くの業界
の人から学び、教育、野球、
教養に分けてノートに書き留
めた。素質が一流でも思想が
二流なら伸びない。子どもた

ちの心の目を作ってやらねば。勝つ野球から育てる野球へ、この変化が甲子園への夢をさらに強くさせた。

「人を大きく育ててくれる所だよ。だから甲子園へ行くことによってワンランク上がって行くんじゃないかな。自分の成長段階がね。だから甲子園は子どもたちを連れて行きたい場所です」

日本高校野球連盟は全国の若手指導者を育てる目的で甲子園塾を2008年からスタートさせた。山下さんは初代塾長の尾藤さんの跡を継ぎ、指導法や心構えを若手指導者に伝えていきます。

■楽しいからこそ上手くなる

(※ビデオ上映での音声から) 子どもに教える。簡単そうに聞こえますが実に奥が深い。アメリカのある偉人はこんなことを言っています。平凡な教師は言っただけで、良い教師は説明する。優秀な教師はやって見せる。しかし最高の教師は子どもの心に火

をつける。未来を育てる最高の教師の指導方針とは？

いま創造性あふれる選手を育成する男がいる。京都サンガFCの池上正(55歳)。

「嫌なことをしないと、あるいは何かに耐えないと上手くならないと思ってる方が多いと思いますけど、そんなことは絶対にないですね。楽しいからこそ上手くなる」

池上は大学卒業後大阪で小学生のサッカーの指導を始め。2002年からジェフの育成普及コーチとして下部組織の育成にあたるかたわらでオシムから欧州の指導方針を学び、地域の幼稚園や小学校などを訪問。子どもたちの育成一筋に力を注いできた。これまで40万人以上の子どもを指導。サッカーを通して体を動かす楽しさや仲間とふれ合うことの大切さを教えている。池上が子どもたちに教えるのは考える力。今回参加したのは3、4年生の子どもたち。

「これから手を叩きます。何回叩いたのか数えてください」「1、2、3、4、5」「はい、



入って」

上手くコミュニケーションが取れない子どもには問いかけ、考えさせる。池上は子どもたちを指導するうえで鬼ごっこを取り入れている。子どもたちが逃げられるのは4色のコーンで囲われたエリアのみ。しかし逃げるのに夢中になっている子どもたちはルールを忘れてします。

「ルールを覚えてますか？」池上は間違った子どもたちを決して叱らない。

「伸び伸びとさせてあげる指導とはどういうものがあるのでしょうか」

「今日たまたま午前中に小学校の指導に行きました。で、鬼ごっこをしたのですが、コーンを立ててこの範囲の中で鬼ごっこするよって言ったけど、そこから外へ出て行く子どもがいっぱいいるわけです。その時に指導者がこの出ている子たちをどうするかですね、一番の問題は。間違いないままの日本の教育はそれはルールが違うから入りなさいと言っただけです。でも私は何も言わないです。でもや



ります。また次の子が来ました。あるルールがあります。でもそれを守らない子たちがいる、でもそのままいきます。どんどんやる。で最後に、自分たちがチームを作って自分たちで試合ができますよという時間もある。来ました。試合できない子たちがいる。あるいはルールを守らない子もいっぱいいる。で、そのとき

に子どもたちに私が話した言葉はルールを破っているんなことしても全部許したでしょ、全然叱らなかつたよ。じゃあ誰がそういうものをやればちゃんとなるの。どうしてできなかったと思いますか。できない理由は誰のせいですかって返してあげると、ピンと来る子たちはみんな自分がやればいいんやって言っわけです。

笑い話じゃないですけど、指導者の一番多い言葉が、わかつた？返事は？はいつて言いなさい。はいつて言ったらよし、いいよって。そんなん全然いいことないですよ」

いまジュニア世代に求められているのはサッカーを楽しむながら自身で考え行動する創造性。そのために大人や指導者がやるべきことは目先の勝利や形にこだわらず愛情を持って子どもたちと接すること。自由な創造性を育てる環境作りが世界への近道なのかも知れない。

昨日の思想によって子どもを縛るのは教育ではなくて、訓練である。明日の思想に

よって子どもを縛るのも、また教育ではなくて訓練である。教育は訓練ではない、創造である。無限の可能性を秘めた子どもたちの創造力が日本の未来を変えて行くのかも知れない。すべては世界で戦うために。

指導に求められるもの

柔道のオリンピック古賀稔彦さんがこんなことを言っています。

●いま日本のトップに足りないと思うのは、選手自ら考えて柔道する力です。試合の中で、自分で自分をプロデュース（創造）する力というのでしょうか。

●いまの選手はちよつと試合で予想外の事態になったり、歯車がかみ合わなくなるとそれで終わってしまう。そこが世界の強豪との違いです。

●でも、それは叩く、体罰からは生まれぬ。自ら考え、工夫する自主的な力が必要なのです。それは「やらせよう」とする指導者の発想からも育たない。主役である選手の思いを、指導者は

どう導き、サポートできるかだと思います。

ロンドンオリンピックで日本の柔道陣は惨敗を喫しました。強化委員会の総括は何で代表選手がそんなに指示待ちになっているんだというものでした。この古賀さんのコメントと合わせて聞いて、それから女子柔道も男子柔道も暴力が蔓延していたということを知って、すごく納得しました。

「外から力を加えて追い立てて頑張らせるといいうやり方は選手がバーンアウトしやすい」

「自分が頑張りたいという自発性を持たせないとなかなか長く戦えない」

「生徒の思いを汲み取る指導に変わっていかないと厳しいのではないか」

為末大さんはそう言っています。

Jリーグができたときに実に監督の8割は外国人でした。何故そんなことが起こったのかについて田嶋幸三さんがこう言っています。

「日本人監督は、自分のチーム

の選手たちを自身の『論理』と『言葉』によって説得しプレーさせる力が足りない」私たちの眼には、そう映っていました。

外国人監督たちの鍛え抜かれた論理で見送ってきたとき、日本人監督はまったくお手上げの状態でした。例えば、外国人選手たちは「なぜこの練習をするのか？」と聞いてくる。彼らにとっては、練習には理由があるのが当たり前。ところが、日本人監督は説明ができません。

ないし、外国人選手から責められていると感じてしまう。

最後に問題を隠蔽させないということを紹介します。2005年以降の日本学生野球協会・日本高等学校野球連盟は指導者・部員の暴力については、軽微であっても全件報告。重大事故についても全件報告。軽いからといって報告しないことは隠蔽と言われ、それ自体に制裁が科されます。

例えば最近の指導者の暴行事件でいうと暴行自体は謹慎1カ月ですが、報告が半年遅れたことよって3カ月の追加制裁を科しています。

バスケットボール部員が自殺した大阪市立高校の野球部の2012年9月の部員間の暴力は、事件発生翌日には、大阪府高等学校野球連盟に口頭で報告がなされ、その翌日には書面

での詳細報告があった。9月14日開催の審査室で審理。対外試合禁止1カ月の処分。

こういう形で早い段階で芽を摘めばバスケットボール部での悲劇は起こっていません。もう一度繰り返します。暴力は許さないとの競技団体としての宣言、行動、教育、隠蔽を許さない対応この4つ(図8)が大事です。

最近でこそ少し減ってきていますが、まだ現在でも暴力はなくなっていない。さきほど冒頭で言っていたウイリアム・ウォードの言葉(図9)です。平凡な教師は、言って聞かせる。よい教師は、説明する。優秀な教師はやってみせる。偉大な教師は子どもの心に火をつける。

ではないでしょうか。実はこの格言は今日の皆さんと私との関係でも当てはまるんです。私は暴力に頼らない指導を今日皆さんにお伝えしました。そしてその理由も説明しました。山下さんや池上さん、荒井さんの力を借りてやって見せました。皆さんの心に「暴力に頼らない指導をやるう」という火がつけば、私の話は成功です。その回答は皆さん一人ひとりが持っています。

図8

競技団体に対して求められている暴力排除の取り組み

1. 暴力は許さないとの競技団体としての宣言
2. 暴力を許さないとの競技団体としての行動
3. 暴力に頼ろうとする指導者への教育
4. 隠蔽を許さない対応

図9

教育者ウィリアム・ウォードの言葉

- The mediocre teacher tells.平凡な教師は、言って聞かせる。
- The good teacher explains.よい教師は、説明する。
- The superior teacher demonstrates.優秀な教師はやってみせる。
- The great teacher inspires.偉大な教師は子どもの心に火をつける。
- 暴力で強制し、服従させる指導者のレベルは？

フォーラム

子どもたちがのびのびとスポーツを 楽しむための指導について



パネリスト

日高 哲朗氏

(千葉大学教育学部教授)



パネリスト

山崎 史恵氏

(新潟医療福祉大学准教授 / 認定スポーツカウンセラー)



パネリスト

植田 辰哉氏

(日本バレーボール協会育成強化委員会
ディレクター / 前全日本男子バレーボ
ールチーム監督)



座長

菅原 哲朗氏

(弁護士 / キーストーン法律事務所)

総合司会 **入澤 充氏** (国士館大学法学部法律学科教授)



入澤 本日の座長は弁護士の菅原哲朗先生です。菅原先生は、日本スポーツ少年団のスポーツ安全対策プロジェクト委員長、国民体育大会委員会委員、同医事部会委員、日本スポーツ仲裁機構顧問、国立スポーツ科学センター倫理審査委員などを務められ、法律の専門家のお立場からスポーツ界に多くの法的なアドバイスをいただいております。また、スポーツ指導者やスポーツドクターを対象とし

た講演やスポーツとリスクに関する各種講演も積極的に行っております。パネリストは千葉大学教育学部教授の日高哲朗さん、新潟医療福祉大学准教授の山崎史恵さん、そして日本バレーボール協会育成強化委員会ディレクターで前全日本男子バレーボールチーム監督の植田辰哉さんの3名に務めていただきます。それでは菅原座長、宜しくお願いします。

菅原 初めまして。まずは登壇いただいたパネリスト、千葉大学の

日高哲朗さん。スポーツ指導の視点からご発言いただきます。宜しくお願いします。続きまして新潟福祉大の准教授の山崎史恵さん。スポーツカウンセラーの視点からご発言いただきます。そして、日本バレーボール協会育成強化委員会ディレクターの植田辰哉さん。前全日本男子バレーボールチーム監督の視点から主に指導の現場についてご発言いただく予定になっています。

午前中の望月先生による特別講演にもありました、公立高校の体罰、自殺事件、あるいは女子柔道の暴力コーチのセクハラ問題と、いうことで不祥事報道が続く、スポーツのフェアプレーはどこに行ったのかという残念な状況にあるのが現在です。

私どもスポーツ法学会の立場からすると、コンプライアンス（法令遵守）やスポーツ団体のガバナンス（組織の統治）が非常に疑問視される状況下にあるということで、本当に残念です。まさにスポーツの自治、もしくはスポーツの自由が問われているわけです。

本年の4月25日には日本体育協会、JOCを含めスポーツ5団体が暴力行為根絶宣言を採択しました。その意味では日本スポーツ少年団においても、このような趣旨を生かしていかなければなりません。

本日のテーマは「子どもたちがのびのびとスポーツを楽しむための指導について」ということです。から、まさに特別講演で述べられた通り、暴力に頼らない指導はどうあるべきか、ということであります。

私どもはスポーツというものは幸福で豊かな生活を営むためのものであり、そして我々自身の権利であるという考え方を持っております。2020年東京オリンピックが開催されるわけですが、世界の人々の目が日本に注がれていく、そういう新しい時代のなかでスポーツ少年団の未来を担う子どもたち、その子どもたちに対してどのような指導をすべきかと、いうことが大きな課題になるだろうと思います。

さっそくシンポジストの皆さんに、自己紹介を兼ねながらご発言をお願いします。まず日高さんからお願いたします。

発表 ① 日高哲朗氏

スポーツ指導者の役割

バスケットボールの指導をしています。たまたま学生時代に幼稚園の教員を4年間勤め、この経験がスポーツの指導に非常に役立ちました。今でも思っています。一応全日本チームの活動なども少しやっております。今は2020年に向けてジュニアエリートアカデミーという形で中学校2年生、3年生の身長の高いプレーヤーを集めて強化に取り組んでいます。ふだんは千葉大学で弱小チームの顧問をやっています。

3つの空間と気分

まず、私たちが体育館に行くときのことをイメージしていただくといのですが、体育館に入ったらずそこ玄関があり、椅子が置いてあるようなラウンジがあります。そして更衣室があります。更衣室で着替えて、そしてコートの中に入っていく。そうすると体育

館というのは「コートの外」と「コートの中」で構成されるというわけです。これに「実社会」を含めた3つの空間を考えてみると、その中で我々が味わっている気分とはどんなものでしょうか。

簡単に言えば、「実社会」というのはイライラしている空間です。あるいは人間関係がイソイソあるいはツンツンという気分であるだろう、と。そして体育館に入ると更衣室で着替えるときに、ウキウキ、ワクワクする。その後、練習が終わってまた更衣室に戻ると、ヤレヤレとダラダラと、ホッとするとということなのではないかと思えます。「コートの中」というのはまさに、ウキウキ、ワクワクするところだし、ハラハラ、ドキドキする空間であるわけです。子どもたちはとにかくウキウキ、ワクワクしたい。もつと言うと興奮したいのです。

日常生活、たとえば電車の中で

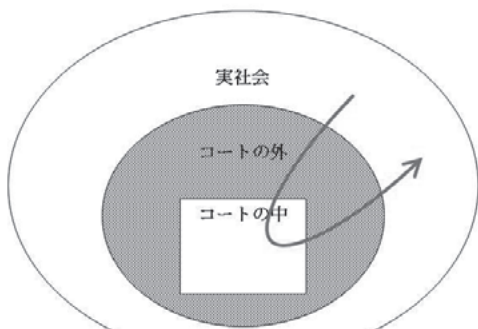
「おいっー」といった強い言葉を聞くとハッとします。日常生活の中ではそういうことをしてはいけない。ところがコートの中では、大声を張り上げたり、あるいはやや荒っぽい行為もある程度は許される。そういうところが子どもたちにとっては楽しい、エキサイティングできるのです。興奮することが許される場、それがコートの中であろうとい

うわけです。しかしちょっとしたら、

子どもたちがコートの中に入ると、監督がいてヒヤヒヤするとか、オロオロするとか、ビクビクすると

3つの空間と気分

実社会：イライラ・イソイソ・ツンツン
 コートの中：ウキウキ・ワクワク・ヤレヤレ・ダラダラ・ホッ
 コートの外：ウキウキ・ワクワク・ハラハラ・ドキドキ
 (ヒヤヒヤ・オロオロ・ビクビク)



コートの外(アジール)
 「役割を外に置いた関係」
 「ただ一緒にいる」
 「同居」
 例：更衣室
 帰り道
 練習後のコート

荒井貞光著「これからのスポーツと体育」同和書院 1986年p13より転載、作図

かそういったことが行われているのかもしれない。暴力というのはおそらく、こういうことなのではないかと思えます。

少なくとも子どもたちは、コートの中に入ったときに暴力を受けるなど全く想定外の話で、本当だったらただ単にウキウキ、ワクワクして終わりたい。これがスポーツ空間の場だと思えます。

コートの外、これをアジール空間、あるいはアサイラムという言い方をします。アサイラムというのは、わかりやすいところでは大使館や精神病院などが挙げられると思いますが、この中では実社会でのルールや規範などが一度停止します。ですからたとえば、北京の日本大使館に北の脱北者の方たちが逃げてきたときに、そこに北京の警察、あるいは中国の軍隊が突入することはない、特別な権利を付与された空間。それがアジール空間というわけです。

このアジール空間は、スポーツ空間の中で言えばコートの外です。コートの中ではやはりプレーヤー間に優劣がついてしまいます。レギュラーのプレーヤー、控えのプレーヤーが必ず出ざるを得ない。そうするとどこでどうしても

上下関係のようなものができあがってしまうかもしれません。ところが一たび練習が終わると、たとえコートの上であつてもそこではプレーヤー間の上下関係が解消します。レギュラーであるとか控え選手であるとか関係がなくなります。指導者とプレーヤーの関係もあるいは先生と生徒という関係も一回打ち消されるわけです。

この時間・空間が保障されているが故に20年経っても学生が、あるいは子どもたちが戻って来ます。それはただ一緒に居たという時間・空間を過ごしたことが非常に大切だったわけです。そうすると我々スポーツ指導者が考えなければならぬのは、コートの中で指導することも一つですが、コートの外をいかに保障していくか、作り上げていくかということになるのではないのでしょうか。具体的には、たとえば練習が終わった後にそこでダラダラ、ホッとする時間を子どもたちに与えてあげること。ところが練習が終わって自由時間があると指導者としては、もっと練習をしろと言いたくなるわけです。子どもにとってはそこでみんなと一緒に、ただダラダラやるといことが非常に大切な空

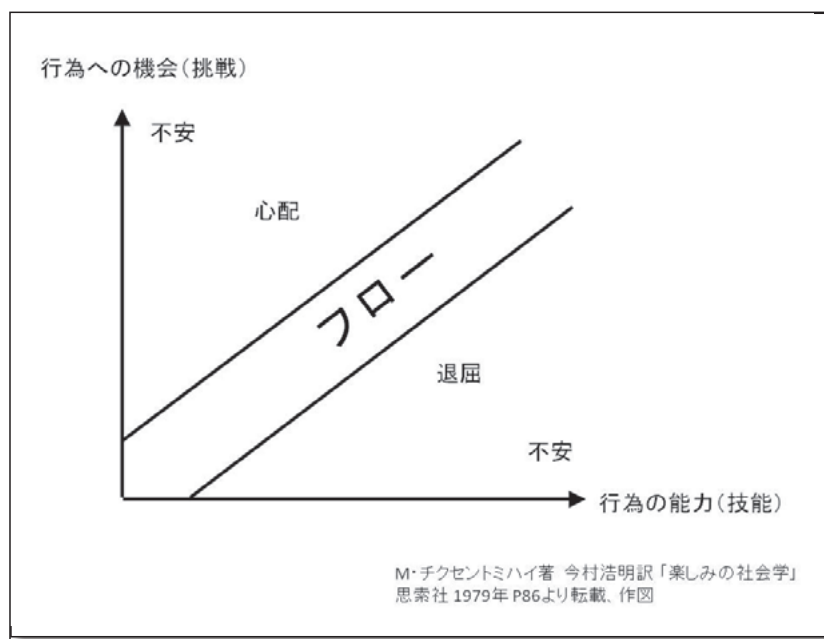
間・時間であつて、そこではおそらく我々が予期しないような教育的効果ができあがつているんじゃないかなというふうに思います。

ウキウキ・ワクワク気分

コートの中はまさにウキウキ・ワクワクするところですが、それを説明するものとして「フロー」という考え方があります。このフローというのは、図のようには、X軸に自分の能力、Y軸に行為への機会、相手のこととです。たとえば冬山の富士山に登る人、これが自分の行為の能力です。が、たとえば高尾山に登るといったときに

うとあまり楽しくないわけですよ。もっと具体的に言うると、たとえば自分の行為の能力のところに柔道初段、二段、三段、四段、五段と数字を振っていき、相手が縦軸、Y軸です。例えば柔道五段の人が柔道初段を相手にした場合、不安になるわけです。こいつ投げていいのかなと。投げたらケガするん

楽しいかとい





じゃないかなと。あるいは自分が柔道四段で相手が柔道二段だったとするとやりながら俺今日柔道終わってから家に帰って何しようかなとか考え、柔道そのものに没頭できない。ところが自分が柔道二段で相手が柔道二段だとすると、自分の行為の能力と相手の力が一致してまずから、その時には柔道に没頭、没入するわけです。

またバスケットボールの話をさせていただくと、ボールを2個使って同時に前後でドリブルチェンジなさい、と言われたらとても子どもたちはできないから不安になるし、心配、退屈になるわけです。

子どもたちにとって難しい練習課題を提供してしまうと、このフロー状態というものを与えられない。子どもたちは、練習で待つている間にお互い突つき合ったり何か余計なことをし始めるわけです。あるいは自分の能力が非常に高いのに、ボール見ないでドリブル片手でやりましょうねという練習課題では、やっつけられないということになってしまう。

確かにスポーツ空間を構成している主体は子どもたちだとしても、そのスポーツ空間を作り上げ

ているのは実はコーチです。すなわちコーチが、指導者が練習課題を与える、そういう責任を持っていますから。そうするとそのスポーツ空間を演出しているのは指導者なんだということを考えなければなりません。

スポーツというのは簡単に言うと3つの要素からできていると思います。一つはスポーツは身体技能を使います。二つめは競争があります。三つめは遊びでありプレーだということです。これはこじつけになるかも知れませんが、プレーは簡単に言えば、プレーフルなアクティビティ、活動ということになります。とするとプレーヤーというのは、楽しい活動をする人です。日本の場合、どうしても教育というものが入ってきて、「スポーツが人間をつくる」とか言いますが、子どもたちは自分を道徳的に立派にするためにスポーツをやりきたるのではない筈です。単に楽しいからやる。つまりプレーヤーというのは楽しい活動をする人であって、その楽しい活動をいかに作り上げるかが指導者であるということになります。

楽しいというのは一体何かというと、自分の能力と活動が合致し

楽しさの要因

- その活動自体が楽しい
- 向上・上達することが楽しい
- 競争することが楽しい
- 交友・友好が楽しい

ていてそこで没頭、没入できる状態だということが言えると思います。

「楽しむの社会学」の中でこの図を提供しているわけですが、この図の非常に良いところはフローに幅があるということです。すなわち自分の能力よりやや高いところであっても、フロー状態になれる

わけです。や

や高い状態に

挑戦すること

が、こじつけ

かも知れませ

んがヴィゴツ

キーの言うところの最近接

発達領域、す

なわち自分の

力で自分を発

達させること

ができるそう

いう課題にな

るわけです。

だから子ども

たちはその

課題を与えら

れると主体的

的・自主的に

いろんなこと

ができるということになります。

そのことをよく考えて指導しなければなりません。

子どもたちの楽しさを考えた場合、これは実際にチクセントミハイが調査したのですが、調査した

相手が外科医、ダンサー、音楽家、

画家、スポーツ選手はバスケット

の選手を対象に調べました。これ

は「楽しさの要因」がどこにあるの

かを調べてみたものですが、ス

ポーツ選手に特徴的だったのは次

の4つです。1つめはその活動自

体が楽しい。2つめは向上・上達

することが楽しい。3つめは競争

することが楽しい。ところがこの

競争については、画家とか外科医

の人たちはまったく興味がありま

せん。そして4つめ、交友・友好

が楽しいとありますが、これもス

ポーツ選手に非常に特徴的で、ダ

ンサーや画家の人たちにはこれは

出てきません。

この4つのうち、1つめはその

活動自体が楽しい、これは非常に

大きな意味があると思います。た

とえばバスケットですと、一試合

に大体7kmぐらい走ります。攻撃

回数が多いと、さらにもうちょっ

と多く走ります。サッカーだと10

kmぐらい走ると言われています。

そうすると指導者としては、勝と

うと思うと技術を練習するよりは

とにかく体力をつけさせるべきだ

と考え、陸上競技部みたいに走ら

せるようになるわけです。ところが

子どもたちは、その活動自体が

楽しいと言っているわけです。さ

らに言うと、子どもたちにとって

活動自体が楽しいというのはゲー

ムを指しています。ところが指導

者は練習中ほとんどゲームをやる

ことはありません。何故ならば、

勝つためにはゲームだけやっても

なかなか勝てないと思うからで

す。

2番目、ここが一番指導者にと

って大切なところ。「向上・

上達することが楽しい」というこ

とです。しかし練習時間というの

はどうしても決まっているため、

その決められた練習時間の中でい

かに効率を上げるか考えたとき

に、特別講演でお話があったよう

に体罰というものが一番手っ取り

早いといった指導が行われてし

まっていたように思います。要す

るに結果を出さなければいけない

が、恐怖というのが一番人間にと

って動機づけとして大きいので、

恐怖を与えられる暴力に安易に依

存してしまい、そこへ走ってしま

うのかと思われま

す。3つめが「競争することが楽し

い」。勝利至上主義と批判されま

す。やはり勝ち負けというのが子

どもたちは楽しいわけです。

そして4つめが「交友・友好」で

す。交友・友好はスポーツの指導

の上で非常に大切だということは

納得できるはずです。コートの中

では競争するわけですから、ここ

で友だちになれと言ってもなかなか難しい。しかし、コートを離れたとき、つまりコートの外で何がしかのつながりがあると、それは一生続きます。高校野球をやったあるいはサッカーをやった人たちが10年経っても20年経ってもOB会というもので会うことを考えてみても、おそらくこのコートの外、帰り道一緒だったとか、更衣室で何かいろいろ話したとか、そういうことがあったが故にそのつき合いがずっと続くのではないかと思います。

指導の実際

(ティーチャー&リーダーとしての指導者)

そうすると私たちが指導者としてやらなければいけないことは、まずコートの中のスポーツ空間を演出していく役割を果たすことです。子どもたちの一番の目標はウキウキ・ワクワク、ドキドキすること、あるいは競争です。そういうことを実現させてやらなければいけない。ただし、この楽しさは子どものレベルとオリンピックのレベルとはまったく違います。一流競技者になつてくると、もつ

と緊張した場面、たとえばメジャーリーグのイチロー選手が松井選手に、いつも打席に立つと緊張状態でどうしようもないんだと相談を受けたときに、「何言ってるんだ、大リーグに来たのはその緊張が楽しいからだろ、ハラハラ・ドキドキすることが楽しいからだろう」と言われた。考えてみたらそうだと。そのハラハラ・ドキドキの内容も小さい子どもたちとオリンピックに参加するような人たちとは質が変わってきます。それを我々はよく感じ取って、指導していかなければいけないのではないかと思います。

菅原 一つだけ質問します。私どもはスポーツ界における暴力行為根絶宣言を出して、その中で指導者はスポーツを行う者のニーズや資質を考慮し、スポーツを行う者自らが考え判断することのできる能力の育成に努力し、信頼関係のもと常にスポーツを行う者とのコミュニケーションを図ることに努めるとなっています。これは大人を指導する場合、特にトップアスリートの場合には本当に重要だと思いますが、ウキウキ・ワクワク、ハラハラ・ドキドキする子どもた

ちに対してはどうか。ひと言付け加えてください。

日高 私は指導をしている時に、まず子どもたちをよく見ることに要するに注目するということが大切だと思います。その次はやはり、その子どもたちは一体何故そういう行動をするのかだとか、何故そういうのかを考えること、子ども

たちに注目し、関心を持つ。そして、子どもたちができた時には承認する。「できた！いまの上手かったね」と。もし期待していた以上によかったらそこで大いに褒めます。できなかった時に叱責あるいは暴力など絶対にあり得ないわけです。



発表② 山崎 史恵氏

カウんセリグ事例から
指導を考える

私の専門はスポーツカウンセリング、心理サポートということで、選手のお話をいろいろと聞いていくことが専門です。いろいろなベルの選手、あるいは保護者、指導者の方々の話をうかがう機会を得てきました。いろいろなエピソードが相談ケースの中に出てきますので、そのあたりを中心に話をしたいと考えています。

いずれもアスリートのケースですが、一つ目はやる気がないという理由で来談を勧められた男子アスリートのケース。二つ目が試合中に思わぬミスを繰り返してしまい、それが動揺につながって、さまざまな身体症状も訴えて苦しんだアスリートのケースです。

事例1

やる気を失った

男子アスリート

仮にAくんと呼びますが、男性

で16歳、高校2年生で個人種目の選手です。主訴は競技へのやる気がないというもの。指導者と何度も話し合ったけれどもがんばる気がしない。競技を辞めたくても待生のために辞められない。もう競技にかかわりたくない、というような状態で相談にきました。

彼は待合室の椅子で下を向いて首をうなだれた状態で緊張気味に座っていました。競技実績のある選手にしては線が細く、高校2年生ですが中学生のような、そんな印象を持ちました。話す時にはポソポソと非常に聞き取りにくい感じで下を向いています。私が何か彼に伝える時はこちらをしつかり見て「はい」とスポーツ選手らしく返事をします。そして私から話の水を向けないとなかなか話が続かない、深まらない感じでした。

た。平日は学校から帰って少し家で横になり、午後5時から11時まで練習と、そういう日々です。土日も朝から夕方まで練習です。休みがなく、この生活は中学校3年まで続いています。この時の指導者は結果が悪いと怒鳴り散らすかなりコワイと恐れている指導者でした。最後は誰のおかげでここまで強くなったんだと言われ、ケンカ別れのような形で中学3年生の時にこのクラブを辞めています。

彼の成績ですが、小学校の全国大会で優勝しています。中学時代も全国大会で優勝しています。高校に入って1年生の時にインターハイに出ています。その時はあまりいい成績が出せず、その後の国体では入賞していません。

これは彼のその時のいろいろな経験についての言葉、表現です。「優勝してもうれしいという感じではなくて、感動などもなかった」。「中学まではやる気があると

か、ないとか考える余裕もなかった」。「毎日の練習が精一杯。課題ができないと居残りで練習をさせられた」。「居残り練習が嫌で一生懸命課題をクリアしていっただけ」。遠征にいろいろ行きますが、「遠征に行った同年代の他の選手は自信があつて試合への考え方もすごい。自分は偽物という不完全な感じがずっとしていた」。「他の選手は輝くものがある。自分はただ練習だけして強くなってきた気がする」。というふうに彼は自分のこと、あるいは自分の競技の経験について語っています。

つまりやる気がないという問題が起きた経緯ですが、まず高校の練習を始めますが彼は中学校のこれまでの練習とはかなり違うと、みんな自分で考えてやっている、すごいというふうに感じたそうです。そして高校に入ってから自分の気持ちに波が出る。やる気

がある時とない時が出るようになった。やる気の波が出たのは、実はすごいことなのですが。そして国体で入賞しているということですので、彼は競技成績が問題ではないと強調します。そしてオフでゆっくり過ごすとということがあったわけですが、それでもやる気にならなくなった。はじめは無理にでもやっていたがそれもできなくなってきた。そして今ほとんど練習に行けない状態になっている。指導者からはもう期待してないからマネジャーでいいと言われたそうですが、それも嫌だということですよ。

面接経過をポイントのみ見ていくと、私自身Aくんにとって練習をしないということの時間を彼にとつてすごく必要な時間だと言っただかかわりました。やる気がなくいま練習を休んでいるということ、学校から4時半に帰ってきて、ずっと一人で料理を作ったり勉強をしたり、一人でテレビでサッカーを見たり、映画を観たり、アルバイトを今度始めたり、父親の釣りについて行ったりというように、これは生まれて初めてということなのですが、そういう時間を彼は過ごして行きます。その中



のいろいろなエピソードをいい時間だなと、彼には今までこういう時間がまったくなかったんだと感じながら詳しく聞いていきました。たとえば映画だったらどんな映画だったの？どんなストーリーだったの？それについてどんなふうに思った？と彼に聞きます。あまりしゃべれませんが、でもいろいろと頑張って語ってくれます。そうすると何か古い村に女の人が来て、村が変わっていくという映画がすごく良かったと。何か彼が置かれている状況の象徴的なものが見えてくるようなエピソードというのがいろいろと出てきました。アルバイトをしていると、小さい子どもを連れて家族がスポーツクラブに来ていると、彼はそんなこと経験したこともないので、すごく不思議な感じがするというようなことも言ったりします。そしてお父さんはいつも土曜日釣りに行ったりしていますが、今まで一度もついて行ったことがない。そういうところについて行ったりする。こういう話を私は彼にとつてすごく大事な時間だなというふうに思っ、受け止めていました。

もうひとつは、彼は高校を決めるにしても、あるいはこれまでの



練習にしても全部母親や指導者に従ってくるという流れでした。そしてこの面接中もずっと、じゃ、アルバイトしなさい、休部しなさい、新しい練習場を探しなさいというふうにも母親が決めて行くということが同時並行で起こっていきましたが、そうしたところも私は「それは良くない」とか、「やらないほうがいい」ということは一切言いません。そういった流れをみながら彼の中でそれをどんなふうに思っているか方向性を歩んでいるのか

など観ていきました。そうすると「洋服はお母さんが派手なのを買ってくるけど、シンプルなのが好きなので合わないんです」とか、いろいろ違いを言ってくれます。「知人から練習に誘われて、お母さんがすごい喜んでるんだけど、自分はそれがすごく嫌で今日思い切って言えたんです」とか。あるいは「いま新しい練習場に行っているんだけどそれを毎日来いと、ちょっと自分は週3回ぐらいで少しずつやっていきたいんだ」と。「でもこういうの言ったことないから親に言ったらいいのか指導者に言ったらいいのかわからないんです」とか。そういうふうにも彼が今まででできなかったような、あるいは心の中で思っているのだけでも表現できなかつたような彼の意思とか、あるいは彼の個性というものを大切に聞いていきました。

面接は12回という非常にカウンセリングにしては短い形で終わっています。最終的には「自分は燃え尽きたかと思っていただけで、でもやっぱり雑誌とか見ているとドキドキしてくる」、そういう発言が出てくるようになります。それから「新しいチームで練習をやってみたら力の差がありすぎて悔しい

と思った」と。「だからゆっくりやろうと思っていたけれども、ちょっと少し頑張ってみようかな」という気になった」とか。そんなことを話すようになります。試合に出てもたぶん今はあまり良い結果が出ないだろうとか、そういうことも受けとめて話すようになります。そして結構楽しいとか、自分の試合、こういうペースでやっているとか、こういうふうにもコーチと話しているとか、結果にこだわらずに力を出し切りたいというような今後の競技につながるような流れを彼自身作っていった、そしてケースが終了という形になっています。

事例2

試合中のミスに動揺する 女子アスリート

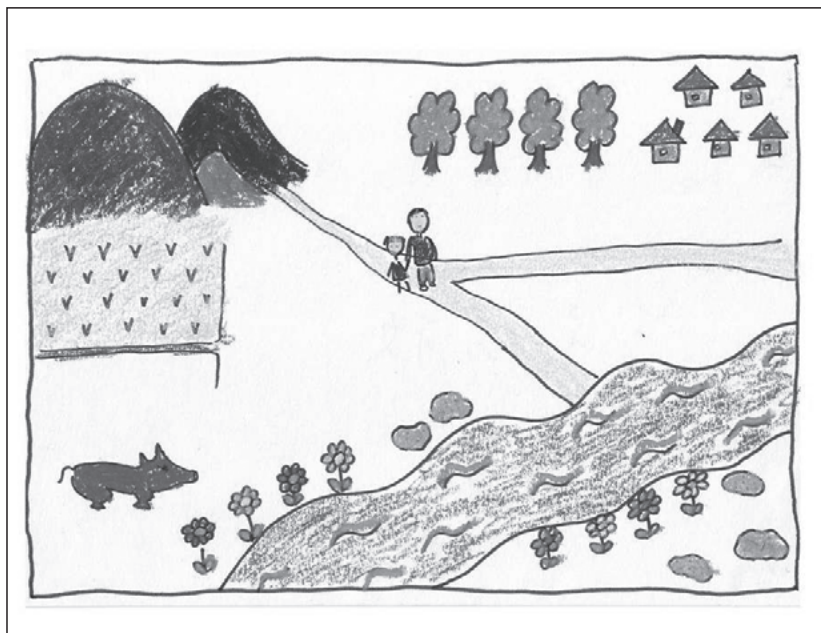
もうひとつはA子さん、これは大学一年生の女子です。ダブルスの選手ということにしておきます。試合でミスをして動揺してしまうということ。非常にバランスがいい方なのですが、肌荒れが目立っていたり、すごく印象が疲れている感じであったりということ、感情もあまり出さずにボソボソ話すというような元気のな

さが最初の印象として残りました。

Aさんは競技を始めて父親にも指導を受けています。そしてチームの指導者もいます。クラブの指導者も父親の指導も厳しくてスパルタということ。試合で負けたら怒られる、練習中反抗的な態度・口の利き方をすると怒られる、無視される、殴られる。そういうことが続いていました。そして中学、高校では普通に進学した中学、高校の部活動として先生の指導を受けることになりましたが、父親に関してはずっと競技成績に対してプレッシャーをかけ続けている。母親も同じように彼女の試合ぶりを見て、すごく否定的なことを言い放ったりというようなことがありました。

小中高を通じて県内でトップレベルですが、彼女もこんな表現をしています。優勝をしても「やった!」という感じでもなくて、崖から落ちそうなところをギリギリ踏ん張って「あー助かった」という感じだったそうです。

彼女は大学に入学をしてミスが続け、実力を発揮できません。ダブルスを組んでいる友人が単純なミスを繰り返すA子に対して痺れ



を切らして苛立ちを直接ぶつけてくるということがあったようです。そういうショックを受けて反論することもできない、パフォーマンスを立て直すこともできないという状態でした。そして悩んで来談という形になっています。

彼女は最初の時期はいろんな感情を出していきます。小さい頃からこれがやりたいという主体性が

ない、楽しくてしょうがないという経験は自分にはないということ

を話します。とにかく人の目が気

になってしょうがない。プレーを

している実際の作戦に頭がまわ

らない。自分の姿を外から見

てうまくやれているのかなとか、

そんなことを試合中

に考えてしま

うような状態。小さい時から試合

に負けるとコーチにも怒ら

れたり、無視

されたりして

勝つことだけ

が心の拠り所

になってきた。

何故自分はこ

んな家庭に生

まれたんだろ

う。大学に入

学するまでを

振り返ってみ

ると心が死ん

でいて無理矢

理からだを動

かしてきただ

け。生きていてよかったです。感じたことがない。それを親のせいにしてしまう自分

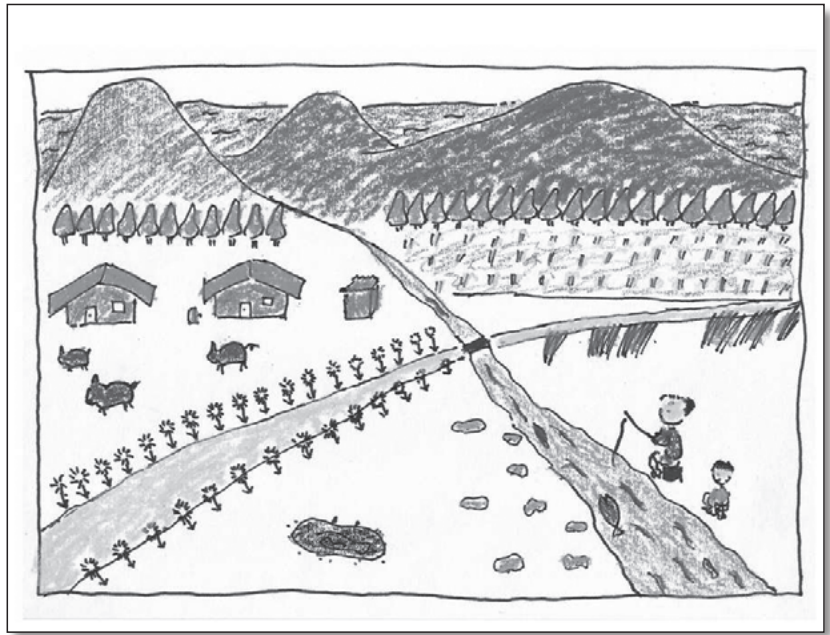
に腹が立って仕方がないというようなことを話します。これがその頃の絵です。

それから次のステップとして、これは100回以上続いた面接ですが、61回ぐらまで彼女は本を読んだり、自分でメンタルトレーニングを試したり、いろいろ取り組みを始めます。人間は磨かないと腐ってくるという一生懸命やるのですが、試合中にも自分の体を思い通りに動かせるようにと力を入れたり抜いたり一生懸命繰り返したりしますが、その反面、不安になった時に自分でストップをかけるけれども、じゃあ何を考えたらいいんだろうというふうに、また逆に気持ちが焦って頭がおかしくなりそうとか、わけもなく心臓がドキドキしてくるだとか。ミスして考え始めると体の中がすり切れそうな感覚があって胸が苦しくなってくる。元気に競技ができないというような、こういうような訴えも増えていきます。

こんな時間を過ごしながら第3期はずっと不眠を訴えていました。このA子さんは面接室に眠りに来ているわけではないのですが、自分で話しながら沈黙などもあつたりして、ソファに座ってコックリコックリ始めます。私は特に起こさず、どんなふうに時間を過ごしてもいいんだよということ、そのまま見えています。そのうち彼女のほうから「横になって寝ていいですか?」「いいよ」と、ここではどんなふうに時間を過ごしてもいいのだから時間が来たら起こしてあげるよということ、寝るようになつてきます。完全に寝てしまつて時間が来て私が時間だよと起こして帰るといふこともありましたが、横になりながらボソボソと思

い浮かぶことを話してくるといふような、そんな状態が週1回面接をして3カ月ぐらいつづいていました。これがちょうど2枚目の絵(次ページ)の頃です。

最後に、大学4年生になり就職活動や大学選手権、インカレですね、それから卒業論文、いろいろな課題に取り組んでいきます。カラカラと元気にこんなふうに笑うんだというように、そんな笑顔を見られるようになり、そして気になる友人に対しても反論をしたり、聞き流したりというように対応ができるようになっていき、もう競技はやらないだろうなと思つていたのですが、競技を継続する



ことを前提に実業団に就職を決めて進んで行ったというようなケースです。

周りに合わせる自分に悩む 思春期の子どもたち

相談に来られた選手たちは今現在指導で何か体罰を受けているとか、問題がある、無理矢理練習を

させられているわけではありませ

ん。大学に来て、あるいは高校に

来て比較的自由に練習ができる環

境にあります。いま暴力を受けて

いるのも何でもない。しかし、

過去の少年期のスポーツ経験の中

に家庭の安全基地としてのベース

が少し弱かったり、それから競技

以外の興味・関心がとにかく著し

く制限された中で、競技だけに没

頭せざるを得なかったり、その中

で主体性・自発性というものが

まったく育ってこなかったという

か、阻害されていた、出せなかつ

たということだと思えます。そし

て暴力や厳しい指導の中で、彼ら

の感情表現というのが萎縮してし

まっている。自分は何か偽物だと

か、自分はこれではダメだとか、

向き合えていないとか、そういう

不完全さ、欠落感みたいなものを

ずっと自分の中に持ち続けている

。そして、その環境に合わせる

ための彼女たち本来の、あるいは

彼ら本来の自分らしさというもの

がまったく見えてこなくて、偽り

の自己、つまりその環境に合わせ

ざるを得ないためにできてしまつ

た自分というものにごく苦しん

でいるというようなことがあるわ

けです。

そしてそういった積み重なって

きた問題が思春期になって出てく

る。パフォーマンスが混乱してく

る。何故か意欲がなくなる。立ち

止まらざるを得なくなってくる。

それから人間関係が築けなくて孤

立感、疎外感に苦しむ。さらには

摂食障害やさまざまな心身症にか

かわるような症

状に見舞われる。

あるいは神経症

的な問題も出て

きたりする。思

春期というのは

自分らしさを

作っていくとい

うすごく大事な

時期なので、こ

れまでの経験が

統合されてくる、

統合して自分ら

しさを見つけて

いく時期です。

その時期になっ

て初めて問題が

どんと大きい形

で出てくること

がカウンセリン

グのケースでは

よくあります。

ですから、少



年期でのスポーツ経験ではなかなか問題が見あたらない、一見うまくいっているというようなことも私たちはそのサインをよく注意してかわかっていかなければいけないということを最後にご提案したいと思います。

発表 3 植田 辰哉氏

ジュニア期に必要な教育

いま、2020年のオリンピックが決まり、オリンピックに向けて小学生・中学生・高校生・大学生・

ナショナルチームの代表の下のカテゴリーをすべてディレクターとして責任を持つて強化をするというミッション

年代別指導指針

(JVA一貫指導カリキュラムより)

年代		期分け	指針
男子	女子		
U-13	U-11	導入期	バレーボールに専門的なトレーニングばかりではなく、様々な動きやスポーツを経験させ、身体のコーディネーション能力を高める。また、バレーボールを楽しみながら、技術の習得を行う。この時期の第一の目的は、バレーボールに親しませることである。スポーツマンシップに関する指導もこの時期から行わなくてはならない。
U-16	U-14	第1育成期	基礎技術の完成を目指して、バレーボールの専門的トレーニングを開始する時期。この時期の子どもは第2次性徴期を迎えているものが多いので、個々の心身両面の成長段階に注意しながらの指導が必要とされる。また、発育発達段階の違いや、バレーボール経験年数の違い(小学生期に始めたものもいれば、中学生になってから始めるものもいる)からトレーニング負荷のかけ方など、多くの配慮が必要となる。
U-19	U-16	第2育成期	ボールを落とさず、ラリーを続けることのできる能力を身につける時期。また、パワーアップのためのトレーニングを開始し、スキル要素の向上を図る時期。かなりの競技者が第2次性徴期を終え、心身ともに本格的なバレーボールのトレーニングに対する準備ができていく。
U-21	U-19	第3育成期	パワーアップ、高レベルのスキル要素獲得とタクティクス要素の向上を中心とした指導を行う時期。

をいただいています。

代表の監督をやったことによって、小学生のレベル、中学生のレベル、高校のレベルで何をマスターしておかなければいけないのかというのを具体的にわかりやすく説明する、そういう大きなミッションが私にはあります。

我々「コーチ」というのは、わかりやすく直訳すると「馬車」という意味があります。これは自分の馬車に乗せて導いて、自分たちのゴールとするところにちゃんと届けるのがコーチング、コーチの役割です。ですから、小学生、中学生、高校生それぞれのカテゴリーの指導者は自分がどこまで送り届けるのか。ナショナルチームまで行くのか、それとも社会人まで行くのか、大学まで行くのか、そのカテゴリーでどこまでちゃんと間違えた方向を向かずに送り届けるかということが皆さんのミッションであり、我々のミッションだと言えます。

正しいコーチング

会場にはジュニア期の指導をしている方が多いと思います。それで一つ言えることは、小学校、導入期に一番必要なのはまずタクティクスと競技ではあり

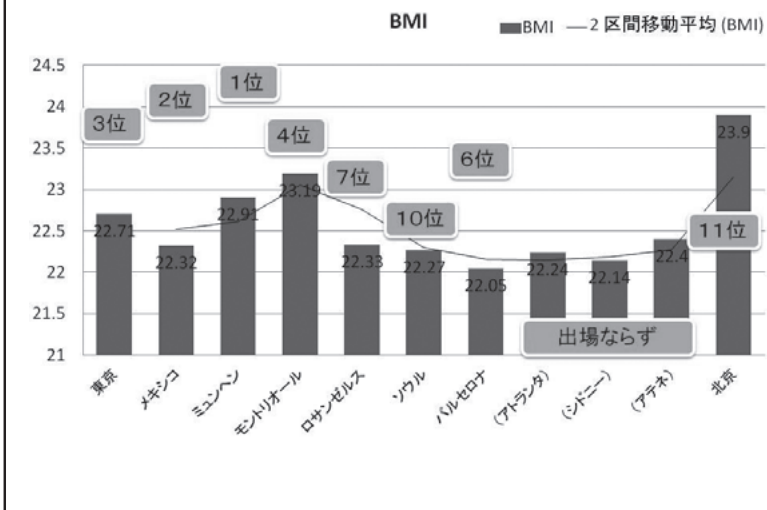
ません。その年代に合わせたフィジカルであったり、成長期の度合いに合わせた技術力であったり、それが非常に求められます。

技術的な要素、たとえばバレーボールに必要な技術はどういうものか。フェンシングに必要な技術はどういうものか。姿勢であったり構えであったりします。神経系が一番発達するゴールデンエイジと呼ばれる小学校の中学年・高学年から中学一年生ぐらいまでの間というのは非常にそこが発達するときに、余計な戦術とか、勝つことばかり求められることによってバーンアウトしてしまう子どもが男子も女子にも多い。これはどの競技にも共通して言えることかなと思います。

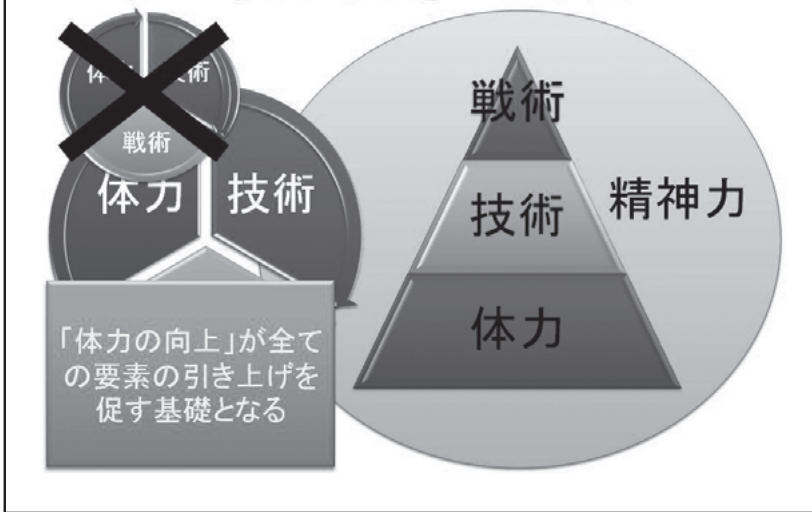
求められる子どもたちの基礎体力

これは過去のオリンピックにお

過去のオリンピックにおけるBMIの推移と戦績



「体力・技術・戦術」3つの関係は？



ているかということが非常に求められるということなのです。

特に小学生のときに、この3つが均等にあってはいけません。小学生の時に技術ばかり、戦術ばかり押しつけてしまつて体力面を全然重視しない。走ること、正しい姿勢で歩くこと、正しいスタートをきること、こうした基本的な技術が身につけていないと、体力が身につけていないと、この関係というのは大きく逆転して逆のピラミッドになってしまいます。

ですからまず一番重要なことはちゃんと体力を身につけて、その上に技術、戦術をのせていくことが非常に重要で、これを無視して技術、戦術ばかりをやつてしまうと大きくなって故障が出てしまつたり、バーンアウトして燃え尽きてしまつたりというような悪い現象につながります。

**必要な
能力・情熱・人間性の検証**

ですから私たち指導者は常に、フィジカルトレーニングをちゃんと積みながら基礎体力をつけながら技術をのせていかなければいけないというふうに私は思っています。

けるBMIの数値ですが、やはり体格面が日本は重要だということ。アメリカ、イタリア、ブラジルといった海外のチームというのは元々日本人とは違って狩猟民族だったのでからだが非常にできています。ですから海外のコーチというのは選手を集めて選考して勝つことができます。でも日本のコーチは育成しながら、なおかつ

強化をしないといけない。そういう意味では、日本人を強化することと外国人を強化することでは大きなハンディキャップがあるというふうに言われています。実際北京オリンピックの時に出場した代表というのは体力トレーニングをやつた結果、非常にBMIの数値は高くなっています。

私たちが大事な試合で将来的に

勝っていくためには、それに必要な戦術、技術、体力が非常に必要ですけれども、一番重要なのはその技術を身につける実践するための体力がちゃんと備わっているか。体力というのはメンタルも含め、いろんな要素がありますが、技術よりも戦術よりも一番重要なのは体力面だということです。子どもたちの基礎体力がちゃんと備わつ

す。

特に小学生・中学生の指導者の方には何度も言いますが、その競技者に合った姿勢であったり細かい基礎的なことをきつちりとマスターする、非常にそれが重要だと思います。

結果を残すためにはさきほど望月先生のお話がありましたけれども、情熱、熱意であったり考え方があったり、能力、この3つのかげ算が本当にバランス良く行われていなければ、能力があっても情熱、熱意が失せて燃え尽きてしまったり、やる気がなかったりすると結果は出ません。考え方、人間性の部分でちゃんとした教育が成されていないと結果は本当に悲惨なものになります。私たちコーチというのはいい選手ばかり集めても勝てないし、情熱、熱意がうすれても勝てないし、ちゃんとした教育ができていないとコミュニケーションスキル、義務教育がちゃんと行われていないと勝つことができないということ、しっかりとその世代に応じた教育をやつていく。それと社会的な教育に関しては、年齢が上がっていくに従ってちゃんとした道德的なことも教育していかなければいけな

いということですよ。

その子どもに必要なことは何かを追求

バレーボールの例を挙げると、いま小学生の子どもたちに言っているのは2024年のオリンピックを目指さないと言っています。で、そのカテゴリーに応じた強化をしましょうという話をしています。

バレーに限らずいろんな競技各カテゴリーにいろんな目標があります。一番重要なことは、その選手にとってどこがゴールなのかということをきちつと伝えてあげること。

ジェラルド・ウリエスさんというフランスのサッカーの指導者が「学ぶことをやめたら、教えることをやめなければならない」という言葉をおっしゃいました。私はたまたま日本体育協会の上級コーチだったりコーチだったりのところに講師として行かせてもらいますが、ひとつ感じることは資格を継続する、また資格を取るためだけにそこに来ている人がいる。学ぼうという意識がない指導者が多いということ、バレーボールの指導者



の中にたまに感じることはありません。

まずコーチングというのは自分が何をしなきゃいけないかということ、各カテゴリーの方々を考えながら、まず見つけて育成して、どんどん競技スポーツとして強化し、移行していくということが非常に重要になっていくと思います。

特に小学生のバレーボールで言えば、Aクイック打ったり、時間差やつたり非常にかつこよくいろんな難しいプレーを習得させている指導者の方がたくさんいます。非常に努力されていると思います。これは本当に僕は素晴らしいと思います。ただ果たして正しい姿勢でちゃんとAクイックを打っているのかとか、そういうところが非常に重要で、その子どもの能力に合った技術をちゃんとマスターさせているのかということが非常に重要だと思います。

いまバレーボールで何が行われようとしているかと言うと、ルール改正です。今後小学生の中でも、小さい選手でも打つ機会を与えてあげる。大きい選手でも守る機会を与えてあげる。そういうルールの改正は子どもがすることはありません。ちゃんとした大人の世界

の中で、いま必要なルールをちゃんと改正してあげると言うことが非常に重要になってくると思います。

今日ここで皆さんにお話をする機会を与えていただいた私の立場としては、将来たとえば日本代表になる、そこを目標にしている子どももいます、親もいます。つい先日香川県からある地方に九州だったり東京に留学する選手がいます。その香川県の監督からうかがいました。「困ってます、香川県から選手がどんどんいなくなっています」と言いました。しかし親にとってみても、子どもにとってみても、やはり自分の娘、息子をいい高校に行かせたいという気持ちは当然あると思います。

だけど、いまいい選手であつても、将来いい選手であるかどうかという保障はありません。中学生で日本一になつても、さきほど山崎先生からお話がありましたけど、小学生で日本一になつても、中学生で日本一になつても大学に行つて燃え尽きてしまう選手もいるし、その選手にとってゴールはどこなのか。ゴールに行つたときにちゃんとしたプレーができるためにいま何が必要なのかというこ



とを我々コーチがこれから考えていかなければいけない大きな課題ではないかというふうに思います。

菅原 有り難うございました。では最後に、各パネリストに同じ質問を一つだけ出します。マスコミの二連の体罰報道に対し、最初に何を考えましたか。

日高 スポーツの体罰問題がいろいろと出ましたが、私たまたま幼稚園の教員をやっている、その時

に私が一生懸命考えていった教材を子どもたちに提供した時に、子どもたちがまったく動かなかつたことがあります。その時に「○ちゃん、どうしてやらないの?」と聞くと、子どもが「ひと言」だつて、つまらないんだもん」と言われました(笑)。その時ハッと気づいて、なるほどと。指導者が勝手に教えたいと思うことをやるけれども、子どもにとってつまらないことほど、こんなに嫌なことはない。子どもたちにとって楽しいって一体何なのかということ



考えなきゃいけない。そこから始めなきゃいけないのに、ちょっと違うところに行つたかなという感じを持ちました。

山崎 私自身は陸上競技をやつてきて、自分自身が体罰を受けた経験はありません。しかし指導者によつては非常に厳しい練習をさせ、体罰を伴うような指導をして育つてきた選手が同じチームメイトにいたりとかということですが、そういう人たちがいるということも知つていましたし、そういう人たちが自分を厳しく指導してくれたから自分は強くなつてこれたと考えているということも知つていました。と同時に私はその時カウンスリングを始めていましたので、実際に殴られて育つてきた選手たちがそのことを後々思い出して苦しむことが非常に多いということもわかつていました。ですので、本当にひどい体罰を受けて育つてきて、それが消化できていないでずっと心の中でフリーズさせているような、凍らせてしまつていような子たちにとつては、今回の報道が大きく成された時にいろいろと溶け出してきた、苦しい思い

をする選手が増えるんじゃないかなということには印象として思いました。

植田 実際私は自分自身が体罰を受け続けてきた選手でしたので、高校時代に相当厳しい体罰と練習で相当厳しいことを強いられました。当時の選手として思ったことは、ああこの監督も自分を叩きながら心は痛いんだろうなと思つていましたけども、実際自分が指導者になって活動するときに一切その体罰に関して否定的な感情を持つて指導できたというのはやはり自分自身がそういう辛い思いをしたという経験があつたから子どもたちに同じ思いをさせたくないという思いでコーチングを学ぶことから入りました。やはり僕は同じ世代の子どもがいましたので、すぐ親の立場で考えてコーチングをするようにし、もし自分の子どもが叩かれたらどうだろうか？ 辛いだろうな。だったら自分もそういうコーチングをしてはいけないなという何か親の立場で考えていましたね。コーチというよりも親の立場で非常に悲しい思いをしましたし、絶対にあつてはいけないと思つています。

質 疑 応 答

羽村 高知県体育協会の羽村で

す。教育現場の中でチームの選手を選出する時に、技量が同じような選手の中でA君を選んだという場合、外れたB君のほうはどう見ても技量が上だという時にその説明の義務は指導者にあるのか。あるいはそれは学校に任されたことなのか。そのへんについてお願いします。

日高 バスケットの場合、たとえば12名選ぶのですが、そのうちのどこか1人を選手と指導者のパイプ役ができるプレーヤー、なおかつ元気のあるプレーヤーを選びます。その1人が技術的にちょっと劣っていたとしても、チームにとって必要だということですのでそういう選び方をします。しかしそこでは事細かな説明というよりは、こういうメンバー構成であるからこういうふうを選んでおし、私の場合それ以上のごときはあまり説明す

ることはありません。

植田 いろいろなカテゴリーの選手によって違うと思います。日本代表選手、特にオリンピックの最終的な選考に15名選ばれていて、さらにそこから3人に絞り込んで3人外れる選手たちであれば非常に大きなショックを受けますし、その3人の選手に対してどういう話し方をするかというのは非常に重要です。

もつとと言うと小学生・中学生の子どもたちになればなるほどちゃんと選手に対して向き合ってあげる必要があると僕は思います。僕がいつもやる方法は、親にはそういう説明を一切しません。子どもにプロセスをちゃんと理解させる。今、私たちはこういう合宿でこういう練習をしてきた。私たちはこういうことを求めてきて、君はこういうことができるか、と認めてあげつつも、「こういうことが足り





白井弁護士

なかったからあなたは今回外れるけれども、これができてきたら必ず君は将来できるから、今回は残念だけれども常に私は見続けていくから頑張りましょう」と伝えま

す。

山崎 心理の立場からひと言だけ補足させてもらいます。子どもたちの選手選考、親御さんたちも絡んでくるので非常に難しい問題もあると思いますが、指導者がどういう方向性で選手を選ぶのかというところが、やはりあらかじめメンバに伝わっている、暗にでもいいですし明確にでもいいと思います。たとえば「走れる選手を使すが、たとえば「走れる選手を使うよ」とか、あるいは柔道であ

れば団体戦だから「負けない選手を使うよ」とか、何か自分のチームづくり、あるいは選手を見ていく際に一番努力をしていた選手を使うよとか、そういうものが事前に子どもたちに伝わっていることがすごく望ましいのではないかと思います。そうすると子どもも納得がしやすいと思います。

小早川 香川県弁護士会の会長をしております。ずっと周りで言われていることは「やっぱりしごかないとダメでしょう」というような感じの話です。実際指導者の中にはそれを信じている方がかなりおられるということです。山崎先生への質問ですが、暴力が選手に

日指導されている先生たちは、本当に大変だと思えます。指導者の心の負担をどういうふうに軽減していくのかということも語られていかないと、なかなか指導者の感情コントロールの問題や暴力の問題や、あるいはストレスの問題、そういうところを一方的に解決しなさい、というのでもまた難しいのかなと感じます。

どのようないい影響を与えているのか、お気づきの点がありましたら教えてください。山崎 いろいろ指導者の心理的なケアということもろもろすごく大事なかなと思えます。長い時間毎

になつてしまふ。そういうマイナス点が非常に大きいと思えます。

白井 弁護士の白井です。植田先生にご質問したいのですが、ジュニアスポーツなのでアンダー13ぐらいですか、そのぐらいの子どもたちの指導の問題について。先生もこのところでは「導入期はさまざまな動きやスポーツを経験させる」と言われておりました。これはよくトップの選手もおっしゃるのですが、特定のスポーツだけをやっていると伸びないからいろんなスポーツをまず小さい時には経験させると言います。そのことと、トップ選手を育成していくために能力がある者や体格の良い者を選抜するということとの関係をうかがいたい。

それと、指導者の多くはトップじゃない子どもたちも教える立場だと思えます。フィジカル要素と技術的要素というあたりの関係についてお考えを伺いたい。

植田 僕はやはりいろんなスポーツを小学校の時にはできれば経験したほうがいいんじゃないかと思えます。その中で、将来自分に必要なものをチョイスできるように

山崎 むしろ指導者の心理的なケアということもろもろすごく大事なかなと思えます。長い時間毎

「救われ、殴られ、救われ、救われ」ということを繰り返していると私たちはこの人のいうことを聞くしかないんだと。この人に見捨てられてしまったら大変なんだという気持ち



大橋弁護士

環境が非常にいいのかなと。

技術に関しては、これはからだの使い方、からだを使う技術という意味です。ですからバレーボールというのは技術の上に専門技術というものがありますから、専門的な技術というのとはもつと上のカテゴリーでやればよいことであって、やっぱりからだを動かす技術というのはこの少年期の時に動かすことが非常に重要で、肘の使い方であったり足の使い方、そういった技術的なことをあらゆるスポーツを経験することによって学ぶことができるというように解釈していただければと思います。

菅原 最後の発言でお願いしよう

とっていますが、第一東京弁護士会の大橋弁護士が現在、いろいろな子どもたちを含めた不正あるいはいじめも含めて体罰等についていろんな基準づくりを進めていきますので、そのあたりの紹介をしてくください。

大橋 現在スポーツ法学会の専門委員会に所属している弁護士と文科省・JOC・日体協・アスリートOB等々、あと学者の先生方で議論されているのは指導における暴力について相談できる機関を作ることです。JOCにも全柔連にも相談窓口はできているのですが、選択肢を増やそうということの中で、日本スポーツ振興センターの中に

作ろうという動きがあります。これは遅くとも来年1月には発足するという流れになっております。

ただ、今現在は対象とされているのはトップアスリート、日本代表の強化指定選手というところを対象にしているのですが、将来的にはトップアスリートを対象とした相談機関をだんだん下におろしていく、全国に展開をしていくというイメージです。

菅原 日本スポーツ界は2020年、東京オリンピックの開催が決まって大きくメディアを賑わせています。キーポイントは優れたアスリートは必ずしも優れた指導者にはならない、やはり学習ということが重要で先ほど言いましたイ

ンティグリティ、高邁・高潔性のあるスポーツ振興というものが国際スポーツ界で大きな話題になっています。いわゆるフェアプレー、スポーツマンシップといった旧来の精神論から、自ら律する・自ら格闘する、自分たちのスポーツの自治を作りながらやっていくという時代に現在研究が進んでいるように思います。人間として、社会人として育っていくジュニアをどのような新しい流れの中で育てていくか。スポーツというのは楽しいこと、難しいことを仲間を取り組み友情を育んでいくんだという経験を先輩後輩の上下、ライバルとの競争、その中でいろいろなことを通じながら創造していくことが大事だと思います。



司会者：入澤充

閉会挨拶



公益財団法人スポーツ安全協会会長

若松 澄夫 氏

本日各地から大勢の方々はこのフォーラムにご参加いただきました。ありがとうございます。また午前中の特別講演、午後いまのフォーラムと長い時間に渡りまして熱心にご清聴いただきましたことに御礼を申し上げます。上げたいというふうにも思っております。

午前中の望月先生の特別講演、暴力に頼

差したかなというふうに感じた次第でございます。また午後

また午後このフォーラムでは、菅原座長のもと3人のパネリストの先生方からそれぞれの立場・視点の異なるところからのお話を聞かせていただきました。大変示唆に富むお話を伺えたものと思っております。誠にありがとうございます。

あまりふさわしくございませんが、ちょっと不謹慎なことを申し上げますと、私ちょうど1歳になる子犬を飼っております。犬のしつけ教室に行きましたけれども、言われたことは二点です。一点目は褒めて育てる、褒めてしつけろということです。二点目は叱るときには決して名前を呼んではいけないと。この二点でありました。犬はお座りができればすぐ褒めて、それでおやつを与える。できなければ、おやつを与えないということになります。叱るときに名前を呼ばないということには叱るときに名前を呼び続ければ、犬は名前を呼ばれば叱られるものだというふうにも思うということでありました。

さて、私なりに一生懸命しつけをしてきたつもりでありましたけれども、気がつくとき褒めてしつけているつもりが、ただ甘やかしているだけということになったりいたします。これではいかんと思ひまして、厳しくし

つけようと考えますと、今度はどうしても犬の名前を大声で呼んだり、ダメときつい言葉で言ったりということになります。これをくり返しているというのが現状でありまして、犬のしつけとスポーツの指導を一緒くたにするというのは無茶な話ではございませんけれども、スポーツの現場に立つておられる指導者の方々のなかには同じような思いを抱いたことのある方もいらっしゃるのではないかとこのように思います。

本日の望月先生の特別講演、それから午後のフォーラムのパネリストの皆様方のお話のなかにはそうした現場の皆様方が今後指導を行っていくために有益なヒントが多く詰まっていたというふうにも思っている次第であります。今後の皆様の指導のなかで今日のお話を時に思い浮かべながら、有益な指導に役立てていただければというふうにも思う次第でございます。

最後になりますけれども、本日の望月先生、それから菅原先生、各パネリストの皆様方、それから司会進行を務めていただきました入澤先生、さらにはこの会場をご用意いただきました地元香川県の関係者の皆様方に感謝と御礼を申し上げて、閉会の挨拶にいたしましたというふうにも思っております。本日はどうも大変ありがとうございます。

主催◆公益財団法人日本体育協会 日本スポーツ少年団
公益財団法人スポーツ安全協会
日本スポーツ法学会



協賛◆スポーツ安全保険引受損害保険会社
あいおいニッセイ同和損害保険株式会社
共栄火災海上保険株式会社
株式会社損害保険ジャパン
大同火災海上保険株式会社
東京海上日動火災保険株式会社
日新火災海上保険株式会社
日本興亜損害保険株式会社
富士火災海上保険株式会社
三井住友海上火災保険株式会社